



道

求

第
參
號

第
拾
壹
卷

求道第拾壹卷第參號目次

求道

◎韋提別選の正意

講義

◎『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第一席 菩提心釋

一、序言 二『教行信證』の題號 三 信仰問題は宇宙、人生の問題と別種 四 ひと通りならざる本願 五 教行、信、證、眞佛土 六 化身土 七 眞假辨別 八 二雙四重釋 九 横超他力 一〇 堅出、堅超、横出一 一 本願力廻向 一二 聖人が『廻向』の源 一三 便同彌勒

告白

◎佛智不思議をその儘に

橘地龜次郎

雜錄

◎癩患者の入信

本多慧孝

講話

◎信仰上のよろこび

近角常觀

時報

◎求道學舍、第二求道會講話概況

毎日曜午前九時

求道學舍

〔本郷區森川町一番地〕

毎土曜午後二時

第二求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三求道會

〔日本橋蛸切町説教所〕

皇太后陛下御歌

四方の海みなはらからと陸びなば世に波風はたゝじとぞ思ふ
民草の上をいかにとおもふ夜の袖にも露のしをれけるかな
むらぎもの心にとひて耻ぢさらば世の人ごとはいかにありとも
綾錦とりかさねても思ふかな寒きおほはむ袖もなき身を
たゝかひの勝のたよりを聞く毎にみいくさ人の身をおもふかな
大宮の火桶のもと寒き夜にみいくさは霜やふむらむ
千よろづの民よ心をあはせつゝ國に力をつくせとぞおもふ
白妙のころもの塵は拂へどもうきは心のくもりなりけり

求

道

第拾壹卷
第參號

韋提別選の正意

○禪家に於て枯華微笑といふことは誰知らぬものはない、されど觀經に於ける即便微笑といふことは、人があまり知らぬ様である、眞宗の人すらあまり深く味はぬ様である。

○されど親鸞聖人の信仰に於ては、是が實に重要なことである、抑々聖人の信仰は、人生々活に於ける我等が罪惡を救済せらるゝことである、故に人生無明の罪惡を救済したまふ如來の大悲本願の力を實驗したる事實、即ち觀經及涅槃經にあらはれたる悲劇及救済が、實に親鸞聖人の信仰の中心である、而して是が單に佛在世の事實としてのみならず、實に現時我等の生活其物の上に加へたまふ本願成就の盡十方無碍光佛の御力である。

○觀經に於ける隱彰の義といふことが、畢竟するに人生罪惡の生活に於ける如來大悲の實驗に外ならぬのである。化身土卷に曰く、彰と言ふは如來の弘願を彰し、利他通入の一心を

演暢す、達多闍世の惡逆に終て釋迦微笑の素懷を彰し、韋提別選の正意に因て、彌陀大悲の本願を開闡す、斯れ乃ち此經の隱彰の義也、是實に露堂々たる聖人が罪惡人生に對する如來救済の信仰である。

○抑々提婆闍世の逆惡によりて、頻婆沙羅王も韋提希夫人も幽閉の身となりて、夫人は愁憂憔悴し、遙かに佛に請ひたてまつりた、佛は成道已來多年摩訶陀國に於て夏安居せられたことなれば、屢佛の御說法を聽聞して居つたなれど、阿闍世王の逆惡の起るまでは眞實の信仰が起らなんだのである。然るに王舍城に於ける大悲劇の結果、韋提希夫人が佛に請ひたてまつたのである。

○佛は耆闍崛山より王宮に没して出てたまひしに、韋提希夫人は身を地に投じて求哀懺悔して救を請はれた、佛乃ち眉間の光を放ちたまひしに、十方の諸佛の世界歷々として現じたのである、時に韋提希佛に白して言く、此諸の佛土復清淨にして皆光明ありと雖、我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生れんと樂ふ、唯願くば世尊我に思惟を教へたまへ、我に正受を教へたまへと、爾時世尊即便微笑したまふ、五色の光あり佛の口より出づと。

○是すなほち釋迦微笑の素懷である、韋提別選の正意である、我等は深く此意義を味はねばならぬ、親鸞聖人は愚禿鈔に阿彌陀佛の選擇本願に對して、韋提希夫人の選擇淨土選擇淨土機といふとを申されてある、阿彌陀佛の選擇本願は愚痴無智破戒無戒、孝養父母も出來ず、發菩提心も出來ざるものゝために持ち易く、稱へ易き念佛一つを案じ出したまひたのである、しかれども未だ愚痴無智云々のものであるとの自覺を起したものはなかつたのである、然るに今韋提希夫人が光臺現國の中に、安樂世界を選んだといふは、即ち諸佛世界ありと雖我如き貪瞋具足の凡夫、愚痴無智の輩は、とても及ぶ所ではない、此の如き我等は唯念佛の一法彌陀の本願より外はないと、いたゞかれたのである。

○常に引く手織の着物の譬喩を以て言ふならば、釋迦如來は韋提希夫人の前に、種々の衣服を並べたやうなものである、清淨なる持戒持律の衣服あり、流行の坐禪修養の衣服あり、萬善諸行の様々の衣服あり、親の作れる手織の衣服もあり、恰も何も言はずして韋提希夫人の前に之を並べたやうなものである、しかるに夫人は之を眺めて、直に我は此手織の着物をいたゞきたいと思ひます、我如き亂暴なる逆惡の凡夫、五障垢穢の女人は、唯南無阿彌陀佛の手織の着物ならては致方はありませぬと、申されたのであります、此言をきゝたまひし釋迦如來は、直にニッコリと破顔微笑せずには居られぬのである、是でこそ實に釋迦の御本懷に叶ひたと申さねばならぬ。

○昔より觀經は機の眞實を説きたといふ、實に機の眞實といふことは、選擇本願は私一人の爲なりけりと實驗されたところある、抑々親鸞聖人が法然上人の御教化をいたゞかれたところがある、法然聖人は選擇本願を御説きあらせられたが、其選擇本願は私一人のためなりけりと受けられたが親鸞聖人である、三百八十餘人の御弟子、皆選擇本願の御教化を聽聞せぬ人はない、しかれども、其愚痴無智破戒無戒の惡人とは、愚禿親鸞なりと御受けなされたのが聖人御一人である、實に彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐あらせられたのが是である。

○聖人が常州稻田に於て教行信證御製作の時竊に以みれば難思の弘誓は難度海を度するの大船、無碍の光明は無明の闇を破するの慧日なりと、選擇本願を舉げ給ふや否や、直に然れば

則ち淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへりと仰せられたが、即ち聖人御自身の御身に御受けなされた御自督である。○恐多きことながら、聖人は信卷下卷の終りに御悲歎の文を擧げさせられ、誠に知んぬ悲哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし、傷むべし矣と仰せられた、而して引續きて佛難治の機を説くに涅槃經に曰くと仰せられて、阿闍世王が煩悶の極入信せし文を擧げさせられた、是實に恐多きことながら、聖人自ら阿闍世王なり、難化の三機なり、難治の三病なりといふ思召と、私かにいたゞきたてまつることである。

○而も眞假眞偽の區別を擧げて、光明師云九十五種皆汚世、唯佛一道獨清閑といふて、上の御悲歎の文を擧げてある、是實に愚禿悲歎述懷和讃の初に、淨土眞宗に歸すれとも、眞實の心はありがたし、虚假不實のわが身に、清淨の心もさらになしと仰せられたと同様である。

○つら／＼聖人の御悲歎を伺ふに、兩様になつてある、一は御自身につきて御身の虚假不實を悲歎あらせらるゝとてある、

主の惡業必ず免るゝを得ず、惟願くば大王速に佛の所に往つべし、佛世尊を除きては餘は能く救ふことなけんと、是實に御身の慚愧懺悔の思召であらう。

○佛涅槃に於ける、我阿闍世王の爲めに涅槃に入らずと仰せられた御言には、密義未だ解すること能はず、何を以ての故に、爲といふは一切の凡夫なり、阿闍世は普く及一切五逆を造る者なり、又復爲は即是れ一切有爲の衆生なり、我終に無爲の衆生の爲に世に住せず、何を以ての故に、夫れ無爲は衆生に非る也、阿闍世とは即ち是れ、煩惱を具足せる者なりと、是實に佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた本據であらう、又佛は一切凡夫、有爲の衆生の爲に世に住したまふといふは、明らかに他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとか、いそぎまゐりたきこゝろのなきものをことにあはれみたまふなりといふは實に是である、私は平素歎異鈔第九章と此信卷終の悲歎述懷の文とは、同一轍たると思ひ出さう、あつたなれども、かくまで文々句々に於て、一致を見出さんとと思ひ設けぬとてあつた、喜ばぬにて往生は一定とあもひたふべきなりとか、いそぎまゐりたきこゝろのなきものをとにあはれみたまふなりといふは、我無爲の衆生の爲に世

實に我こそ阿闍世王である、逆惡の徒である、愛欲名利のであると慚愧懺悔せられるのである、述懷和讃の引續きに、外儀のすかたはひとことに、賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪僞おほきゆへ、奸詐も、はし身にみたり、惡性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり、修善も雜毒なるゆへに、虚假の行とぞなづけたる、無慚無愧のこの身に、まことのこゝろはなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功徳は十方にみちたまふ、小慈小悲もなき身に、有情利益はあもふまじし、如來の願船いままさずば、苦海をいかでかわたるべき、蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじし、如來の廻向をたのまては、無慚無愧にてはてぞせんとなるは、御身に於て阿闍世王をいたゞきたまひたのである。

○是れ涅槃經の文に、若婆答て言く、善哉善哉、王罪を作る雖、心に重悔を生じて而も慚愧を懷けり、大王諸佛世尊常に是言を説きたまふ、二の自法あり、能く衆生を救く、一には慚二には愧なり、慚は自ら罪を作らず、愧は他を教へて作らしめず、慚は内に自ら羞耻す、愧は發露して人に向ふ、慚は人に羞づ、愧は天に羞づ、是を慚愧と名く、無慚愧は名づけて人と爲さず名づけて畜生と爲す、乃至大王今定て知りぬに住せずとか、又復爲とは即是佛性を見ざる衆生なり、若し佛性を見んものには、我終に久しく世に住せず、何を以ての故に、佛性を見るものは衆生に非る也、阿闍世とは即是一切未だ阿耨多羅三藐三菩提心を發さざるものなりといふ佛説そのまゝである。

○偈に實語甚微妙、善巧於三句義、甚深秘密藏、爲衆故顯三示、所有廣博言、爲衆故略說、具足如是語、善能療衆生云云といふは、大聖於哀の善巧とか、種々に善巧方便しとか仰せらるゝ根源にして、阿闍世王の爲に涅槃に入らずといふ句義に於て、甚深微妙の密義を彰す善巧攝化なりとの思召である、大聖の／＼もろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけりの意義である、而して彼の隱彰顯密などいふ文字も、たしかに此密語甚深より來りたのであらう、○本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとしむ、いつゝの不思議をとくなかに、佛法不思議にしくどなき、佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり、即ちこゝの涅槃經の文に、如來の密語は不可思議なり、佛法衆僧亦不可思議なり、菩薩摩訶薩も亦不可思議なり、大涅槃經亦不可思議なりとある、是である、是難

思の弘誓である、彌陀の誓願不思議である、名號不思議である、德號の慈父である、してみれば月愛三昧は無碍の光明である、光明の悲母である。

○如來爲一切、常作慈父母、といふ文句も輕々にはいたゞけぬ、爲一切といふは一切有爲の衆生、煩惱具足の凡夫の爲といふことになる、光明名號の慈父悲母ともいたゞける、當知諸衆生、皆是如來子とは、念佛成佛是眞宗といたゞきたるものは眞の佛弟子である、眞菩薩である、世尊大慈悲、爲衆修苦行、如人著鬼魅、狂亂多所爲とは、我等が煩惱に著せられて狂亂の所爲あるがために如來の御苦勞下さるとである、五劫永劫の御苦勞である、我等が狂亂のために御苦勞下さる大聖權化の善巧矜哀もまた實に狂亂の所爲である、是淨邦緣熟と言はるゝ點である、淨土の機緣熟したと言はねばならぬ、淨業機彰るゝいふ文字も亦隱彰の意味であらう、然るに動もすれば青年の人が時代の思想に驅られて誤解に陥り、我等が煩惱狂亂の所爲を以て責を佛に歸して、佛の所爲の如く思ふてはならぬ、されど我等が狂亂を救はんがために、達多阿闍世の惡逆が起りて、遂に釋迦微笑の素懷を顯したまひたことをいたゞかねばならぬ。

ある、久遠劫よりこの世まで、あはれみましますしるしには、佛智不思議につけしめて、善惡淨穢もなかりけり、聖德皇のあはれみに、護持養育たへずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします、かくのごとく佛智不思議を信じて、淨土眞宗に歸すれども、眞實のこゝろはありがたしと、悲歎したまふのである。

○悲歎述懷和讃の一面は、この眞宗の味をいたゞかず、徒らに善惡の考を挟みて、佛智不思議を疑ふ權假の信仰を歎きたまふのである、草稿には疑惑和讃も悲歎述懷和讃の中に入れてある、全體正像末和讃が此如來の誓願の不思議なしてはたすからぬことを示されたのである、末法第五の五百年、この世の一切有情の、如來の悲願を信せずば、出離その期はなかるべし、九十五種世をけがす、唯佛一道きよくす、菩提に出到してのみぞ、火宅の利益は自然なる、五濁の時機いたりては、道俗ともにあらそひて、念佛信ずるひとをみて、疑謗破滅さかりなりとある、悲歎讃には當時の佛教者が佛智不思議を信ぜざるのみならず、其心何等の信佛の心なきを悲歎したまひてある、曰く、五濁増のしるしには、この世の道俗ことごとく、外儀は佛教のすがたにて、内心外道を歸敬せり、かなしきか

○聖人は飽まで御身の上に於て、煩惱具足愛欲名利のそくばくの業をもちける苦惱の群萌なる阿闍世王なりと悲歎ましましたのである、從て韋提別選の意義は、聖人が法然上人の選擇本願を御身に受けさせられて、彌陀五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけりと仰せられた意味となるのである、されど特に韋提希夫人といふ女性といふ點より言へば、慈信尼公が聖人の教に信順して、女人往生の先達をなし下されし事實を仰ぐことが出来る、行者正受金剛心、慶喜一念相應後、與韋提等獲三忍、即證法性之常樂といふも是である、是實に稻田に於て教行信證を書きたまひしとき淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへりと、佛智不思議を仰ぎ、一生之間能莊嚴の家庭的眞宗の化儀を肇めたまひたのである。

○此點に於ては聖人は直接に聖德太子の靈告を蒙り、其化儀に則りたまひたのである、故に聖德太子讚に、佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなりと、疑惑和讃を受け來りて、此佛智不思議を信ずると疑ふとが眞假の區別の岐るゝ處である、上の涅槃經に如來密語は不思議なり、佛法衆僧不可思議なりとあるも是て

なや道俗の、良時吉日をらばしめ、天神地祇をあがめつゝ、ト占祭祀をつとめとす、僧ぞ法師のその御名は、たうときと、いさゝしかど、提婆五邪の法にて、いやしきものになづけたり等と仰せられてある。

○聖人は御自身の内懷虛假、愛欲名利を悲歎したまのみならず、諸寺の釋門が眞假の別を知らず、洛都の儒林が邪正の道を分つことあたはざるがために、念佛停止の迫害、死罪流罪の違法が起りたることを悲歎したまひたのである、この點においては、たしかに此等の出來事の起りたることを、末法の有様提婆逆惡の有様と御覽なされたやうである、是實に淨土の緣熟したのである、如來の本願のあらはるべき時來りたのである、是即世雄の悲正しく逆謗闢提を惠まんと欲してなりと仰せられた點である、又教行信證の終に如華嚴偈云、若有見菩薩修行種種行一起善不善心菩薩皆攝取是である。

○是聖人が世にくせごとの起り候ひしかば、それにつけても世のなか安穩なれ、佛法ひろまれかし、朝家の御爲め、國民のために念佛すべしと仰せられた所以である。

講

義

『教行信證』信卷(菩提心釋より)

(第三回夏季求道會講話)

近角常觀

第一席 菩提心釋

一 序言

(初に教徳文拜誦)

然就菩提心有二種。一者堅、二者橫。又就堅復有二種。一者堅超、二者堅出。堅超堅出、權實顯密大少之教、歷劫迂迴之菩提心、自力金剛心菩薩大心也。亦就橫復有二種。一者橫超、二者橫出。橫出者正雜定散他力中自力菩提心也。橫超者斯乃願力廻向之信樂。是曰願作佛心。願作佛心即是橫大菩提心。是名橫超金剛心也。橫堅菩提心、其言一而其心雖異、入眞爲正要、眞心爲根本。邪雜爲錯、疑情爲失也。忻求淨刹道俗、深了知信不具足之金言、永應離聞不具足之邪心也。

信證』なれば、畏れ多きものによりて聖人の信心其の儘を喜ばせて貰ふと思ふのである。學問の細き筋道は私は知りもせねば、又夫れを詮索しやうとも欲し無いのである。

二 『教行信證』の題號

そこで、いつも言ふことなれども、初めての方の爲めに『教行信證』なる題號のことを、少しく申述べやうと思ひます。御覽の如く此の『教行信證』は、初めに『顯淨土眞實教文類』次に『顯淨土眞實行文類』……『信文類』……『證文類』夫れに『顯淨土眞佛土文類』『顯淨土方便化身土文類』と、此の六卷ありて、之を六軸の聖教といふ。而して引くるめて『教行信證』と申して居ることであるが、斯くいふと何やら六かしき如きも平生頂く『歎異鈔』十二章の言葉には、

他力眞實のむねをあかせるもの／＼の聖教は、本願を信じ念佛をまうせば、佛になる。そのほかなにの學問かは、往生の要なるべきや。

とあつて、此の「他力眞實のむねをあかせる諸の聖教は、本願を信じ、念佛を申せば佛になる」といふ之が『顯淨土眞實教行信證文類』といふことなのである。即ち『顯淨土眞實……文類』といふは、「淨土眞實を顯す……文類」といふ事であつて、即ち「他力眞實の宗をあかす諸の聖教」といふ事である。文類とは、其の昔からの諸の聖教を、聖人が類集せられたのだから、即ち文類である。其の淨土眞實の宗をあかす諸の聖教は「本願を信じ、念佛を申せば佛になる」……即ち御同やう、常に聽聞の廣大の本願を信じて、南無阿彌陀佛と念

今日は第三回の夏季求道會を開かせて貰ひ、其の第一の席を初めさせて貰ふ事である。一昨年来年々此の會を企て、前以て雜誌其他で御通知する事も叶はず、諸事不行届なるにも係はらず、年々會津より出て下さる同朋は、今年は殊に聖人の御舊蹟地稻田に立寄りて茲に御來着下され今は又大和より大原老人は態々御上京下された。又前から九州より出かけ下されたる方もあり、其上平素東京に於て御縁の方々は、斯く何れも此の會の開會を以て、年中の樂みの時として、斯く多數に集まり、御世話下さるのである。又平日御縁少き方にも、此の時に於て御來聴下さるやう有り度いと思ひ、其の心も運んで居ることであるが、要するに何れより見ても、此の一週日の會期を、一年の求道會中特に樂みの會として、之より引き續き晝夜喜ばせて貰ふと思ふことである。第一平日不法懈怠の私自身が、此の時に於て細々ながら、有難き慈悲を喜ばせて頂き度い、と思ふこととてあります。

今年は只今拜讀の菩提心釋によりお話することになつて居る。こは『信卷』上巻の畢り方からお示し下されある御文にして、即ち昨年度講本の『三心釋』の續きの文である。即ち意味に於ては昨年度三心釋に連絡する御教化であるけれども、今は此の菩提心釋の處からを頂かせて貰ふ事である。而も只今拜讀した『歎異鈔』中に、茲にお知らせ下さる横堅二超のことを仰せられあつて、殊に有難いと思ひ、今年は初めに讀ませて貰ふ事である。處て斯く『教行信證』を講本として話させて頂くのであるけれども、私の學問的に話すので無い。一に聖人があなたの信仰の儘をお書きなされしが一部の『教行

佛すれば、其の本願のお恵みにて佛になり、淨土に生れるといふ唯是れ丈けのことにて、「そのほか何の學問かは往生の要なるべきや」……即ち此の外に何も入らぬと仰せられる、此の「本願を信じ、念佛を申せば佛になる」といふ之が教、行、信、證といふことなのである。即ち文字に當つれば、本願は教であり、信じてが信であり、念佛を申せばが行であり、佛になるが證である。斯く教行信證といふことが一つ／＼別々に在るで無く、「本願を信じ念佛を申せば佛になる」といふ、此の事一つをお知らせ下さるに他無いのである。而して其の教の本願なることが何かといふに、私共一人々々が今日人生の苦に悩み、醉生夢死の境界に惑溺して、自分て自身を何うとも仕て見やう無きが、今日御同やう涯無き生死の大海に漂うて居る有様である。然るに斯く永劫生死流轉を離れられぬ私なることを哀れみまします廣大の佛ありて、其思召は、斯く私の迷うて居るのが可哀相で捨て、おけぬとの御親切心である。即ち其のお心より、飽く迄／＼お見捨てなく私に向うて下さる佛の親心が即ち大悲の本願である。即ち佛が斯く遣る瀬無き大悲で、汝を待ち受くるぞとの、佛の仰せが本願の教なのであります。

三 信仰問題は、宇宙人生の問題と別種

そこでこれを青年諸君に多少分りよいやうに話すに、遠慮なく申すに、今日青年の頭に先入主となりて、信仰問題に邪魔してゐるのは、一にはこの宇宙に對する考である。此の宇宙

は何ういふものかと、此の宇宙に對する問題は昔の人には無つたのであるが、今日人には此の宇宙及び外界が如何との思想が直ぐ引つて來て、此方面より信仰を考へた方が分り易い、といふ風の先入が有つて、爲に直接信仰問題に行き難くなつて居るのである。又一つは私の常に言ふ人生問題、其の人生に對する考へ方が、この日常の人生其物を直ぐ意味あるもの、正しきもの、斯くくのもの、即ち人生其物を直ぐ活かしてゆき度い、といふ此の思想である。斯くはつきりは分けられぬも、先づ此二類有つて、而して「佛と宇宙との關係如何」「イヤ我々を斯く生活せしむる者が佛である」など、何と云つて此の人生宇宙を、佛と結びつけ度いと考へるのである。こは私自身が前夫れて有つたから、無理ない事と思ふのであります。夫れ故青年諸君にする時は、斯く何とか人生其物を活かして行き度いと考へて居る處へ、いきなり佛の本願と聞かされても、はつきり頭に喰いつかぬ。其の本願は、我々罪惡の衆生をお見捨てなき慈悲であるなど、言はれると、九て自己の考へて居る事とは別事のやうになつて仕舞うのである。こは私自身が前文章に「本願力廻向なる文字を書くことがあつて、其の時大に感じたのである。て其時も其の意を以て書いて置いたら、果して茲の處に久しく行き止まつて居られた或方が、夫れを見て涙雨の如く、泣いてお慈悲に入つて下された。私は其の方が喜ばるゝに就けても、成程容易に分り難いも其の筈だと、情々感じたのである。て茲に反すゝも言はなくてはならぬは、佛の本願は此の宇宙人生が兎や角といふ問題と全く事ははり、總て私の悩み、苦しみ、永劫の迷ひ

……蓋し人生は何程意味つけて考へても結局迷ひの人間といふ外無いのである。然るに其の此の迷ひ、苦しみの人生に「其の汝の迷うて居るのが如何にも可哀相である」「夫れが哀はれて捨て、置けぬ」と、此の迷ひの私をして迷ひより脱却せしめ、永劫の樂しみに安住せしめ度いばかりに、其の遣る瀬無き思召一つが根底となりて、此の界に顯はれて下されたが佛の慈悲でましますといふことである。抑々佛のお慈悲は何かといふことは、私が斯く迷ひの人生に朝夕浮かみ沈みつ漂うて居る、夫れが可哀相故止むに止まれぬ本願が根本となり、悟の境より大悲の姿を現はし、私共一人々々を待ち受くるぞとある、此の佛の慈悲が如來の教であります。

四 ひと通りならざる本願

妙なことを言ふやうなれども、全體眞宗の者は、小供の時より本願々々と聞き慣れて、恰も親の膝下に在る者が、親の可哀がるは當り前だと思つて居ると同じて、如來の本願を初めから當り前の事に仕まつて居るのである。又眞宗を今迄きかぬ人は、今の如く直ぐ人生宇宙といふ考へが先きにあり、本願と聞いても何の事だか分らぬといふ風になつて居るのである。處が私は其の兩方の道を通つて來たから、兩方が分るのである。私は初め長い間本願を當り前の事のやうに聞いて居つて、後學問するやうになつてからは、此の宇宙人生と何ういふ風に在るか、又長々此の問題に頭を突込んで來たのである。而して夫れてやつて居る中に實際上の苦しみに突き當り、今迄考へて居つた總ての思想は何等の力もなさな

くなり、人生に一點の光りも明るみも見出せなくなつて仕舞

うたのである。而して其の最後に、斯く絶対に悩み苦しむ、何程藻掻いても仕て見やう無いのが人間の眞相である。然るに私の此の仕て見やうなき心中を察し、此の苦惱を哀はれみて、飽く迄廣大の同情を以て捨てぬとある佛のお心、お光りと、此の佛の遣る瀬無き御哀れみ一つを頂くなり、「有難や」と忽ち夜が明け、本願の偉大なる事が初めて分らせて貰へたのである。

そこでこは斯く特に事分けて申す積りでも無つたのであるけれど、全體教行信證の教といふ事が、斯く一通りの事で無いのである。既に『教卷』の初めにも、

夫れ眞實の教を顯はさば、則ち大無量壽經是れなり。斯の經の大意は、彌陀誓を起發して、廣く法藏を開いて凡小を哀れんで、選て功德の寶を施すことを致す。

とあつて、即ち大悲の阿彌陀佛が、斯く私の罪深く仕て見やう無さを哀はれみて、茲に思ひがけなき廣大の慈悲を以て其の私を捨てぬとある、實に此のひと通りならざる事柄なのである。私は極言するに、今日世間では皆な誰々の哲學など、持てはやつて居るのであるけれど、其の根本は要するに、人生世界宇宙が何うかといふ、此の人生其物に光りを見出す問題の外に無い。處が先きも言ふ如く、此の人生宇宙は何程考へても、迷ひの人生、苦の世界に他ならぬのである。爾るに今佛の本願は、私が其の苦其の迷ひの爲めに、態々悟の境界より光を放ち、姿を現じて、其の私を捨てぬとの遣る瀬なき大悲を以て臨んで下されたといふ、茲實に世間ひと通りの事

て無きことを、皆さんに能く味はつて頂き度いのである。

五 教、行、信、證、眞佛土

さてすると如來の本願は、斯く罪惡の衆生が捨てられぬといふ唯夫れ丈けの同情、哀れみかといふに、然うて無い。其の遣る瀬無き大悲より、今日今時に至る迄、佛は其の私の爲に一念一刹那も清淨ならざる事なく、眞實ならざることなく、其の長々のあなたの御苦勞が固り表はれて、今日現に阿彌陀佛と顯はれ、此の迷ひの世界以外に、眞實の佛土を成就してお待ち受け下さるお慈悲である。て斯く此の世では到底仕て見やう無い私なるが爲め、斯く此の世以外に遣る瀬無き大悲より、眞佛眞土ありて、夫れが私の爲め眞實の佛であり、眞實の淨土である事を知らせ下さるが、即ち『眞佛土卷』である。

而して其の眞實の佛のみ名は何か、といふに、即ち南無阿彌陀佛は其の佛のみ名である。佛は夫れ丈けの廣大の慈悲で私に向つて下さるのであるが、夫れは何によりて私に近附き、接して下さるか、といふに、即ち佛は有らゆる十方世界の有らゆる佛に我が名を稱えしめ、稱讃せしめ、我が斯く遣る瀬無き思ひて待ち受くるぞとの事を、十方衆生に知らしめんとする。即ち、我が彌陀は名を以て物を攝すて、遣る瀬無きみ心の有り丈けが、南無阿彌陀佛の六字名號に表はれてある。言ひ換ると、遣る瀬無き本願の様が、即ち南無阿彌陀佛の呼び聲である。て其の廣大の呼び聲によりて、其の遣る瀬無き本願の胸に徹して下された一念に、其の佛の眞實が私に届いて

下されて、茲に初めて人生の夜が明け、之が信樂開發の一念である。此の一念には佛の哀れみの有り丈けが、私の心中に貫はれるもの故、自づから南無阿彌陀佛々々と、口に念佛が稱へられる。其の上はイヤでも應でも、遣る瀬無き願力で、佛の報土に往生し必ず佛にならせて頂けると、其處で其の本願が教、念佛が行、信心が信、佛になるが證、之が教行信證といふことなのである。而して其の教行信證は、顯淨土眞實教行信證とあつて、凡そ世の中に眞實の佛の教、眞實の如來の慈愛といふことは、此の教行信證の外に無いのである。夫れ故此の淨土眞實の教行信證ばかりは、説え人が何と言はうが、説え首がちぎれても、之ばかりは皆様に是非聴いて頂かねばならぬとなる。そこで斯く此の迷ひの人生の上に、眞實の佛がまじ／＼て、其の佛は我々の斯く迷ひを出られぬが可哀相で、其の私が捨てられぬとある眞實大悲の塊である。で我々此の人生にありて、自分の考えや、自分の力では、到底安心出来ぬが、其の出来ざることを哀れみ思召して、眞にかくいふ我が親心を頂いて呉れとある、此の遣る瀬無き本願念佛の呼び聲一つを聞けば、實に有難いとも尊いとも言ひやうの無い廣大の哀れみにて、夫れを頂くと、其の一念に不可稱不可説不可思議の功德が私の心中に入り満ちて下され、其の一念に即ち往相の一心を發起して、所謂

六趣四生の因亡し果滅するが故に即ち頓に三有生死を斷絶す故に斷と曰ふなり。(信卷)

である。而して其の上からは、廣大の願力に牽かれて、眞實報土に往生させて頂き、佛になると、之が教行信證といふこ

となつてあります。

六 化身土

『教行信證』には、猶ほこの外に『化身土卷』といふのがある。こは方便權化の淨土にして、恐らくは同じ佛敎を聞いて居る者の中にも、上述の眞佛のお光りに接せぬ者が澤山ある。一言にして言へば、如來の眞の慈悲といふ事は、斯く我々が一善一行もなし能はざる者なるが爲め、其の爲めの遣る瀬無きみ心なることを知らずして、何程か自力でも出来る積りて今猶ほ自力聖道の敎に止つて居る者は、皆な之である。夫れ故然ういふ者は、未だ如來の眞のお恵みが頂けず、未だに聖道權化の假の敎へ、方便の敎えにうろついて居る者である。夫れ故聖人は之を『和讃』にお知らせ下されて

念佛成佛これ眞宗、

萬行諸善これ假門、

權實眞假をわかずして、

自然の淨土をえぞしらぬ。

聖道權化の方便に、

衆生ひさしくとどまりて、

諸有に流轉の身とぞなる

悲願の一乘歸命せよ。

又同じ他力の敎を喜び、同じ念佛稱へて居る者でも、矢張り

自分の方で稱へ、自分の方で喜び、有難がるのであると、猶ほ自分といふことに力がは入つて居る中は、矢張り自分の修養、

喜び、念佛といふことになり、眞實佛のお慈悲を頂いたにな

らぬ。夫れ故然う言ふ權化方便の、假の敎え、假の信仰に止

つて居る者は、眞實の佛土に往生せずして、矢張り方便假設

の假りの淨土に往生すると、之を知らせ下されたが、即ち

『化身土卷』である。斯く聖人が『顯淨土眞佛土』と示して

眞實の佛、眞實の淨土を『教行信證』の骨子としてお知らせ下された裏には、斯く『顯淨土方便化身土』がありて假りの佛があり假りの信仰がある。其の假りの佛とは、我々自力で、自分の方よりこさへ上げ、作り出した佛が假りである。此の眞實權化の區別が厳しくあることを知らなければならぬのであります。

七 眞假辨別

全體親鸞聖人御一代の御敎化は、此眞實權化の辨別といふことが、あなたの最も御苦勞あつた處なのである。御存知の如く、法然聖人三百八十餘人の御門弟は、何れも御師法然聖人の仰せに従ひ、口に念佛を稱へられぬはなかつたのである。けれども何れも言葉尻に拘泥してしまつて、折角選擇本願の念佛を口にしながら、夫れが皆な自力の行になり、眞に聖人の敎を下さる本願の眞意が頂けた人は、僅に五六輩にも足りなかつたのである。處が今親鸞聖人の敎を下さる如來眞實の敎といふは、一分一厘も自分の方より計らひを加へざる、一點一毫も自分の方でこしらへた處の無い、如來直さ／＼の仰せ其の儘を知らせ下さるのである。其處になると、昨年度講本で頂きた三信釋初めの御言葉には、

愚惡の衆生の爲に、阿彌陀如來已に三心の願を發したまへり。云何が思念せんや。答。佛意測り難し。然りと雖竊に斯の心を推するに、云云。

といふ御文さへあつて、之など考えやうによりては、「大經に三心の願と説かれてある、云何が思念せんや」といふ風にあつ

てもよさうな處である。然るに聖人は、斯く直さ／＼「阿彌陀如來已に三心の願を」と、阿彌陀如來直接に筆を起させられ、「然りと雖竊に斯の心を推する」と續けて、如何にも直さ／＼佛の思召を頂いて佛の御眞意其の儘を、如何にも正々堂々と、我々にお取次下さる様が見ゆるのである。又『信卷』の序文には、

爰に愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閱し、云云。

とのお言葉もあるであります。で斯くの如く、佛が斯ほど迄の遣る瀬無きみ心で、我々衆生を待ち受け下さるとの佛の信心を、釋尊の言葉通り直さ／＼佛より頂いて、其の頂く儘を知らせ下されたが、聖人一代の御敎化である。而して我々其の佛直さ／＼の仰せをお聴かせに預ると、斯くの如く遣る瀬無きみ心で待ち受け給ふ大悲の御眞實とあるに、之を我々自分の方より考へたり、喜んだりすること佛になることのやうに思ふて居るは、實に勿體なき次第であります。而して其の佛直さ／＼の眞實の敎えは何かといふに、即ち先き程の「他力眞實の宗をあかせる諸の聖敎は、本願を信じ、念佛を申せば佛になる」……之をも一つと言ふと、即ち教行信證、といふ事になる。又此のお言葉のものとをいふと、即ち先きの『和讃』の「念佛成佛是れ眞宗」の一句にして、之が大悲衿哀の眞の御まことであり、眞の敎えであり、眞の宗教である。此の以外の萬行諸善は、凡て是れ假門である。然るに「衆生久しく聖道權化の方便に止まりて、諸有に流轉の身とぞなる」我人共に大に目を醒まさせて貰はねばならぬことである。故

に茲は全く日本に生れた者が日本に在りて、日本特有の尊き味ひを知らず、西洋にゆきて一時西洋の事情に感心し、西洋化して日本に歸り、初めて日本獨特の變つた處あるに目が醒むる如く、眞宗の信者、初め念佛を澤山に思ひ、夫れが分る分らぬの問題で、とうとうイヤ修養であるの、宇宙であるの、人生であるの、藝術であるのと、様々の處に迷ひ込み、さてまわり／＼て歸つてくると、どれもこれも皆な聖道權化の假の教えに過ぎずして、最後に頂く處は、もの、斯く何等の力なき私を、飽迄捨てぬと仰せ下さる此の眞の御心は一つと、之が實に聖人一代の御苦勞の大精神である。而して之を顯はし下さる聖教なる故に即ち『顯淨土眞實教行信證、眞佛土、化身土文類』とあるのであります。

八 二雙四重釋

已上は大分際どく申したのであるが、聖人の御教化は斯く際どい處を頂かねばならぬのである。處が際どい中にも、殊に聖人が際どく區別して知らせ下されたが、今席之より話す、所謂二雙四重の御教化である。一應御文を讀ませて貰うと

『然るに菩提心に就て二種有り。一つには堅、二つには横なり。又堅に就て復二種有り。一つには堅超、二つには堅出なり。堅出堅超は、權實顯密少の教を明せり。歷劫迂廻の菩提心なり。自力の金剛心、菩提の小心なり。』

實に味の深い御教化である。總じて親鸞聖人の書き物や、信仰上の御さとしなど見ると、一面甚だ畏れ多き事ながら、不

得要領の點が多いやうにあるのであるも、一面からは一分一厘、一糸も亂れさせて無い、寸毫も矛盾せる所無いことを頂かなくてはならぬのである。夫れはいつとも言ふ御文なれども、『御文』に聖人の仰せを引かせられて、

故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人もたずとこそ、おほせられ候ひつれ。そのゆゑは、如來の教法を十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるばかりなり。さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法を、われも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり。そのほかは、なにをしへて、弟子といはんぞとおほせられつるなり。さればとも同行なるべきものなり。

親鸞に於きては、如來が十方衆生と呼びかけて、十方の衆生を等しく遣る瀬なく待ち受けるのである、此の如來の仰せを其の儘十方衆生に傳へるばかりだから、親鸞の言ふ處には更に變つた處は無い、如來が十方衆生とある仰せを、其儘十方衆生に傳へるばかりだ、とある此の上より言ふ時は、世の中に聖人の哀れみを受けぬ者は一人もある事無い。實に天の如く廣く大きい哀れみである。すれば如何なる者でも、何でもよいのかといふに然らざるや無い。十方衆生此の本願を頂かぬことには、皆な可かぬのである。お慈悲に夜が明けぬことには、承知出來ぬのである。斯くの如く、十方衆生皆な平等に、一子の如く更に一點の偏頗なく哀れみ給はる聖人であるが、其者に此のお慈悲一つを知らずといふ段になると、あれも可かぬ、之も可かぬ、此のお慈悲一つでなければ皆な駄目である、茲は又非常に厳しいのである。それが今日の處に又最も

際立ちて表はれてあるのであります。

先づ存覺上人は、今日の處を二雙四重の釋として、お知らせ下された。即ち聖人は茲で堅出堅超横出横超の四つに分けさせられあるのである。分り易く言ふと、先づ大きく分けると、衆生の菩提心に、堅にゆく道と横の道と、此の横堅の二つがある。其の堅の道に二通りあつて二つに分れ、又横の道にも其の二道がある。それは堅の道では先づ堅出堅超の二つに分かれると、茲になると、如何にもはつきりと、一點のよどみなく分けさせられてあるのである。勿體無きことなれども、私など小供の時嘗つて思ふた事がある。夫れは今迄哲學的の書物など讀んだ目で聖人の『教行信證』など頂くと、堅出であるの堅超であるの、横出であるの横超であるのと、何うも聖人の教相判釋が飽き足らぬ。茲は昔から聖人の教相判釋として、一切經を茲に攝められたと言ふのであるがこは古來どの宗旨にも、どの祖師にもある事なのである。併し勿體なき事なれども、他の宗旨の教相判釋は、一代教を見る見方が、頗る學問的になつてある。爾るに聖人の、堅であるとか横であるとか、出る出ぬ、超る超えぬなど、頗る學問的でないと、此の二雙四重の御釋を甚だ巧みならざる別け方のやうに考えたのである。こは現に或る人は、親鸞聖人は頗る著作の下手な人で、『教行信證』など何が書いてあるのか薩張り分らぬと、言つて居られると聞いて居るが、私も小供の時はずいぶん風に思つて居つたのである。處が今頂くと、實に此の『教行信證文類』は、有らぬ經文の有難き處を、恰も錦の切れをずらりと並べた如く、並べて見せて下されたもので、今

日の學者が「あゝかう」と持つて廻はり、こね廻はして居る類とは段が違つて居るのである。恰も黄金を敷きのべた如く、ずらりと一代教説の、最もうまみのある有難き處を並べて渡し下されたが、實に此の『教行信證文類』一部の御製作で。夫れと同じく、此の二雙四重の御判釋も、信心頂かすして自力で往く道筋と、眞に如來のお慈悲が分つて、お慈悲一つに救はれる味ひと、之を即ちあなたの心中の實験の上から、分りよくお示し下されたものとなるのであります。

九 横超他力

そこで前に反り、堅、横とある堅とは何か、といふに、我々が此の世で自力で佛になる道が、堅の道である。そこで今日の青年が、如是の世界をすぐ悟りの世界とは言はぬも、此の迷ひの世界に於て、此の迷ひの身が佛になり、此の世で悟りを開いて、此の世の上に淨土を見るとき、聖道門の道は凡て堅である。又横とは何かといふに、此の迷ひの世の中に迷ひの私を他より哀れみ給ふ佛ありて、其の他なる佛に助けられ、救はるゝ道が横である。即ち此の迷ひの世界以外に廣大な悟の佛境界がありて、其の佛の遣る瀬なき光明のお照しにより、其の佛のお力によりて佛土に往く道は皆な横である。で斯く堅、横と、理屈も何もないので無い。一口に言へば、自力で眞すぐに悟りてゆく道の故に自力は堅の道であり、又他力は横の方より佛の光明に照らされて、佛のお力で救はるゝ道なるが故に即ち横である。で堅は聖道門、横は淨土門と斯くきちんと横堅二門に分れるのである。そこで私共自分て

佛になる道は、何れも皆な聖道門で、豎の道である。處が他力淨土門となると、現在斯く苦しみ、迷ひの我々に對して、其の苦其の迷ひを哀はれみ救ふが爲めの、廣大の本願を立て淨土を成就して、遣る瀬無く呼びかけ給はる佛ありて、其の佛力の故に淨土に往かるゝ道故、横である。そこで初に先づ此のことを仰せられて、「菩提心に就て二種あり、一つには豎、二つに横」とある。

處て斯く聖人が横豎二門を分けさせられたは、『樂邦文類』の中に在る桐江の擇瑛法師の、横豎二出の御文によらせられたものであるが、處が今席最初に拜讀した『歎德文』の中には此の事を仰せられて何うあるかといふに、

かねてまた擇瑛法師の釋義について、横豎二出の名を模すといへども、宗家大師の祖意をさぐりて、たくみに横豎二超の差をたつ。彼此助成して權實の教旨を標し、漸頓分別して長短の修行を辨す。他人いまだこれを談ぜず、わが師ひとりこれを存す。

即ち擇瑛法師の釋文には、唯横出豎出と、横豎二出あるだけなのであるけれども、聖人は更に此の上に巧に横豎二超を立て下された。之が實に有難い處なのであります。處でかくいふと際立つけれども、之が何れも聖人の新發明で無い。昨年度拜讀した三心釋中の善導大師の御言葉にちやんと之があるのである。夫れは

道俗時衆等、各無上心を發せども、生死甚だ厭ひ難く、佛法復欣び難し。共に金剛の志を發して、横に四流を超斷せよ。云云。

ちになり、何程有難い／＼と喜んで居つても、結局肝腎の慈悲に夜が明けぬ中は、他力中の自力なる横出に止つて居るもので、之では眞實の安心は貰へ無い。處が不思議なる哉茲に此の仕て見やう無きを、飽く迄見捨て無きが眞の佛の大悲、眞の佛の思召とさく一念に、

往相の廻向とくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の信行をしむれば、生死すなはち涅槃なり。

本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、すみやかにとくさとらしむ。煩惱菩提體無二と、實に之が横超他力の思召となるのであります。

一〇 豎出豎超横出

そこで以上をお知らせ下されたが、今の御文となるのである。讀ませて貰ふと、「又豎に就て復二種有り。一つには豎超二つには豎出なり。豎超豎出は、權實顯密大少の教を明かせり。歷劫迂廻の菩提心なり、自分の金剛心菩薩の小心なり。」斯く豎出豎超を茲に一邊に言うて仕舞はれてあるのである。夫れは何かといふに、豎出豎超は共に自力の菩提心故、茲には用が無いのである。猶は一々の言葉を言ふと、權實顯密は權實は權大乘實大乘にして、華嚴、天臺、禪等の一乘究竟の教を實教と言ひ、之に對して三論、法相等の未了方便の教を、權假の教といふのである。又顯密は眞言の所説に於て、眞言を密教と名け、之に對して天台、華嚴等を顯教として取扱ふのである。て要するに、權實顯密大少の教は、聖道門自力の有らゆる教は皆な此の權實顯密大少の教であつて、即ち豎出

即ち「横に四流を超斷せよ」と、茲に斯く明に横超といふ言葉が出てあるのである。こは昨年度充分話した處であります。

そこで聖人は斯く更に横豎二超を立て、横にも豎にも出と超とがある。出とは之を一口に言ふと、我々が長いことかゝりて順々に道を踏んで行く道が出てある。又超とは「こえる」で、一足飛びに飛び超える道が超である。そこで豎出とは自力修行の聖道門の方で、順次に三僧祇百大劫の修行を経て佛にゆく教えが、豎出である。又同じ聖道門でも禪宗などの如く一邊に悟つて生死を飛び超える道があつて、之は自力中の超で、即ち豎超である。又横出は、自分で行く無しに、他なる佛のお力に照され救はれる淨土門の道であるが、其の淨土門にても、眞の佛の思召しが頂けず、自分の方より佛を仰ぎ喜び念佛し、此方よりすがり求めることで救はれやうといふ風の、猶ほ修養的立場に在る者は、即ち淨土門中の自力で、横出である。處が彌々此の極惡最下の我々が、其者をお見て捨て無き眞實最後の佛の思召一つで、「あゝよくも」と、一邊に生死を超斷させて頂くのが横超と、之ではつきり頂けるのである。で二雙四重の判釋といふと何か六かしき如きも、各自が自分々々道を求める立場に考えて、我々が佛になる道筋に自力で行く豎の道と、佛力で救はるゝ横の道と、二つある。其の豎の道にも、漸々に修行して遂に到達する豎出の道と、一邊に頓悟する豎超の道と二つあるが、我々長い間之を追ひ之で求めて來たのであるけれども、此の自力の道では到底我々は到れ無い。然らば横の他力門はとなりても、其の他力中にても、自力で念佛稱へさして貰ひ、自力で頂いた氣持

豎超は此等有らゆる自力の諸教が之であると仰せられるのである。又歷劫迂廻は、即ち夫等自力諸教の或ものは、三僧祇百大劫の修行を経て、非常な遠う廻はりして、遂に悟りにゆく道であるから、即ち歷劫迂廻の菩提心である。即ち之は長い間かゝつて生死を離れる豎出の方に當たるのである。菩提心は言ふ迄も無く、上求菩提下化衆生の、所謂求道心の事であります。又「自力の金剛心菩薩の小心」は、即ち自力の大菩薩が、不退勇猛の大道心を發して、頓に悟りに入られる其の金剛心のことであつて、即ち菩薩の小心である。これは自力中でも一邊に生死を飛び超える禪等の豎超の方に當るのである。で豎出豎超の豎の菩提心とは之等であると、仰せられたのであります。

『亦横に就て復二種有り。一つには横超、二つには横出なり。横出とは正雜定散他力中の自力の菩提心なり。』

即ち横の中の横出に就て、横出とは正雜定散、他力中の自力の菩提心であるとの仰せである。正雜定散は、正雜は即ち淨土門に於ける正行雜行であり、又定散は即ち冥想的に心に觀念を凝し、靜に考察して行くやり方が定であり、散は其の反對に實行の上に諸の善を修してゆかうとするのが散である。で今度は先きの自力聖道の豎の道とは事變はり、人生以外に遣る瀬無き佛の哀はれみを蒙りて淨土に参らせて貰ふ淨土門他力の横の道の中にても、眞に佛の思召の頂けぬ間は、何うしてもし此方の方より諸の行を修して、佛のお救ひに預らうといふ根性になる。而して其の他力中の自力修行の上に於ても夫れ／＼があつて、雜行があり、正行があり、定があり散がある。

詳しく言へば難行の有らぬ行を難え修するに對して、純粹の淨土の正行として選ばれたが五種の正行であつて、即ち專稱佛名、專心讀誦、專心觀想、專心禮拜、專心讚歎の五つである。又此の五正行の中でも、專稱佛名を正業と名け、他の四つを助業として居るのであるが、其最も大切の念佛であつても、設え其の稱え方が冥想的定行の態度であれ、又實行の散行の態度であれ、此方が稱えて喜ばせて貰うのだと稱へて居る間は、矢張り他力中の自力たるをまぬがれぬのである。況んや其他の諸行に於ては、唯形に於て遣る瀬無き佛力を豫期して居るといふ丈けて、其の根性に至つては全然他力中の自力たるは言ふ迄も無い。而して之が外で無い、今日御同やうが、眞に如來のお慈悲に腹底から満足するといふ事なくして、或は之てよいのだと我と我が心で押えて、中途半の喜びに腰かけたり、或は中心如何はしく思ひながらも、稱へられる念佛を頼みにやつて居るといふ有様が、皆なこの正雜定散他力中の自力の道に腰下して居る者である。で横中の横出といふは、之等正雜定散他力中の自力の機だと、仰せあるのである。

二 本願力廻向

さて此の次ぎが

『横超とは斯れ乃ち願力廻向の信業なり。是を願作佛心と曰ふ。願作佛心は即ち是れ横の大菩提なり。是れを横超の金剛心と名るなり。』

之が實にどえらき御言葉なのである。聖人の知らせ下さる他力眞宗は、茲て斯く願力廻向といふことがポイントと出て來

せを得るは、實に此の願力廻向の大悲にまします故である。實に斯く力強く願力廻向を知らせ下さるは眞宗以外に無いのである。願力廻向なるが故に、即ち信の一念に佛直き／＼の眞實が、其の儘私の心中に開顯して下され、即ち夫れが横の大菩提心とあるのてあります。猶ほ此の願力廻向なる御教化は、もと『淨土論』の本願力廻向なる御言葉から出て來るのである。之が意味ある事柄故、之につき少し申述べやうと思ひます。

三 聖人が「廻向」の源

抑々『淨土論』に於て、禮拜、讚歎、作願、觀察、廻向の五念門といふ事が仰せられあつて、この第五の廻向門といふのが、廻向なる言葉の出て來るものとなのである。處て『淨土論』に於ける此の五念門といふは、普通の讀み方にする時は所謂行者の五念門故、從つて廻向は行者が人を救ふ意味となりて居るのである。故に往相廻向といふ事は、行者が此の世に在りて人を救ふこととなり、又從つて還相廻向の力といふ事も、既に淨土に往生した人が、再び一如法界の都より種々の身を現じ、種々の神通を現はすことにて、即ち其の行者の本願力より起る處の廻向の行となりて居るのである。然るに吾が聖人は、斯く『淨土論』に於て、此の本願廻向を、還相廻向の菩薩のこと、仕てある處を、法藏菩薩の事と御覽下されたのである。故に本願力といふことも、又法藏菩薩の本願力といふ事になつて來たのであります。夫れ故聖人は『行卷』に於て、他力と言ふは如來の本願力なり。論に曰はく、本願力と言ふは、大菩薩法身の中に於て、常に三昧に在つて種々の身、

るのである。之でなくては茲は言ひやうが無いのであります。何うかと言ふに、今迄の豎出豎超横出の、此方より佛に向ふ菩提心とは今度は全く事變はり、如來の眞實眞宗は、其の自力の道では到底往かれぬことを知召し、其の者の爲めに佛の方より遣る瀬無く向うて下さるお慈悲である。であるから今度は、斯く私が罪深さを飽く迄見捨てず、遣る瀬なくいふて下さる本願も、又夫れが其儘表はれた南無阿彌陀佛の名號も、又夫れが此方に届いて下さる信樂も、又夫れで參らせて貰ふ淨土のさとの境界も、乃至夫れより現はれて人を化益出來る還相廻向のお力迄が、皆な衆生が哀はれ／＼との一心より五劫永劫御苦勞の結果、あなたの眞實を此方に差向け、廻施して下さる、其の願力廻向の賜はり物ならざるは無いとなるのである。即ち先き程いふ教も、行も、信も、證も皆なやるせなき願力廻向のお與へ物にあらざるは無い。之は明に『教卷』の初にも此事を仰せられて、

謹みて淨土眞宗を案ずる二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相。往相の廻向に就て眞實の教行信證有り。云々。

而して之が何處で私に貰はれるかといふに、此の遣る瀬無き思召の、遂に私の心に徹到して下された一念が、即ち信樂開發の一念にて、其の一念に夫れ等廣大の御廻向の眞實が一邊に私の心に頂けるもの故、即ち其一念に横に四流を超斷させて頂く事が出來るのである。夫れ故聖人は此の願力廻向の信樂が、實に横超の大菩提心であると。こは著しきことにて、即ち極惡下劣の我々が、茲に意外にも斯くの如き横超の仕合

種々の神通を現じたまふことを示す。皆な本願力より起るを以てなり。云々。

即ち本願力廻向といふ事が、斯く阿彌陀如來の本願力廻向といふ事になつて來たのである。斯く五念門中第五の廻向門の行が既に如來廻向となりて見れば、他の四念門も、又勿論法藏菩薩の願力成就となり來るは當然である。即ち『二門偈』に願力成就を五念となづく。

とあるは此故である。又『行卷』に於て、聖人が菩薩の自利々他を、凡て皆な法藏菩薩の自利々他と言はれたも、此故に他ならぬのであります。去りながら斯くの如く、廻向を以て如來の本願力廻向とせられた根本は何によらるゝかといふに、實に曇鸞大師の御差圖より現はれたのである。即ち之が毎に言ふ有名な彼の他利々他の御文なのである。之も讀ませて貰ふと、論に五門の行を修して以て自利々他成就したまへるが故にと言へり。然に竊に其の本を求むれば、阿彌陀如來を増上縁と爲るなり。他利と利他と、談ずるに左右有り。若し佛よりして言はゞ、宜く利他と言ふべし。衆生よりして言はゞ、宜しく他利と言ふべし。今將に佛力を談ぜんとす、是の故に利他を以て之を言ふ。當に知るべし、此の意也。

即ち斯く明に如來の力をば、認められてあるのである。而して自利に對して他利と言ふて然る可きを、利他と言はれたは何うか、と言ふに、即ち利他が、佛よりして衆生を利して下さる佛力をよく表はす言葉であるからである。而して之に直ぐ續いて、

凡そ是れ彼の淨土に生ると、及び彼の菩薩人天所起の諸行

は皆な阿彌陀如來の本願力に縁るが故なり。何を以て之を言ふとならば、若し佛力に非ずば四十八願即ち是れ徒に設けたまふらむ。今明に三願を取つて、用ゐて義の意を證せむ。云々。

所謂是れが有名なる三願的證の御文である。即ち之によりて阿彌陀如來本願力廻向なる偉大なる事が顯はれ出たのである。即ち聖人が『證卷』に於て

宗師は大悲往還の廻向を顯示して、慇懃に他利々他の深義を弘宣せり。

と仰せられたは之を言はれたのであります。すれば往還二種廻向なることは、我々が淨土に生れ、又淨土より還來する事は、皆な佛の御廻向といふ事になるのである。斯くの如く此の願力廻向といふ事は、實に他力眞宗の根本にして、親鸞聖人は斯く三願的證の御文より、遂に教、行、信、證皆な夫れ此の本願力廻向より示し下されたのであります。

さて斯くの如く、ひとたび願力廻向となり來つた上は、願作佛心も度衆生心も、もとゞ佛の願作佛心であり度衆生心であるのである。それは『正像末和讃』の

淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、

すなはち願作佛心を、度衆生心となづけたり。

の御左訓に著しく示し下されてある。即ち御左訓に、願作佛心は、佛が設け我佛を得たらんと宣ふたと同じであるところ。恰も五念門中の作願門を、佛の作願と仰せられたと同やうである。又度衆生心の方は、佛が設け我佛を成らんと、衆生を救はずば正覺を取らじと宣ふた思召が、度衆生心であるところ。斯くの如く、佛の願作佛心、度衆生心であるが、此の遣る瀬無き願作佛心度衆生心が、遂に私の心に届き下されたが、一念開發の信樂である。故に其の信樂の一念には、自ら淨土に参り度いの願作佛心も、又一切衆生の苦を抜き度い

の度衆生心も具はりてあるのである。斯く我々が一念開發の願力廻向の信樂には、願作佛心度衆生心の偉大なる力が具はりてある故、之が横の淨土の大菩提心である。之を横超の金剛心と名く、と仰せありたのであります。

一三 便同彌勒

猶ほ此の次ぎに「横堅菩提心其の言一にして」以下の指示がありて、之は彌々横超の金剛心を勧め下さる御文である。即ち斯く菩提心に横堅四種あるが、能く正邪眞偽を分別して、眞の大悲於哀の正要たる願力廻向の横超の金剛心を頂かして貰はねばならぬ。彌勒菩薩は聖道の堅超の金剛心、即ち菩薩の真心を發して、遂に堅に生死を超越し給ふのであるが、我々はひとたび横超の金剛心を頂く一念に、此の度び此の界にして横に生死を超越させて貰ふのである。『信卷』には宣はく眞に知んぬ彌勒大士は等覺の金剛心を窮るが故に、龍華三會の曉無上覺位を極むべし。念佛の衆生は、横超の金剛心を窮るが故に、臨終一念の夕大般涅槃を超越す。故に便同と曰ふなり。

又『和讃』には

五十六億七千萬、彌勒菩薩はとしをへん、

まことの信心うるひとは、このたびさとりをひらくべし。實に今回の講話は、之が根本になつて居るのである。故に一面より言ふと非常な自信力を得、一面からは此の上なく罪深く地獄一定の仕て見やう無き者なのである。この仕てやう無きが少々善くして助らうとなれば、忽ち堅になり、横にても横出になる。横堅菩提心言葉は一つであるが、よく正邪眞偽を勘決して、正要眞心を頂かなければならぬ。猶ほ茲は次第にも少し申述べ、又茲の菩提心釋は大に法然聖人と關係ある問題故、其處を次第に詳述し度いと思ひます。

(第三回求道會第一日第一席)

告白

佛智不思議と其の儘に

橘地龜次郎

私は四十二才の今日まで、惡き事さへ爲さざれば、別に宗教の必要もなきものと、自分勝手に極め込て居りましたが、不思議や昨年些々たる人生問題に突き當り、ふとした動機で、今年一月善智識様なる近角常觀先生に御出逢申し、始て佛道を御聞せして頂き、不思議にも三月廿九日の日曜日、本郷の求道學舎の道場にて、法話拜聴中、俄に佛陀の御慈悲がまことにならぬ程有難くなつて、遂に泣き伏したのであります。處が先生より其所感を書けとの御命令故、辭退も出來ず、能く書き表はす事も出來ざれども、御恩報謝の一つとも考へ書く事に致しましたが、佛法を聞くの日常淺きが故に、佛語の如きも知らず、又告白文の如き體裁も存ぜず、丸で一種の履歷的になり、又私の自慢咄の様でもありますが、事實を其儘書かして頂く事になりましたから、少々長くなり、誠に済みません。何卒御判讀を願います。

私は加賀國石川郡山島村下島田の藤原と申す家で生れたの

て有ます。都合在つて壯年に至て、金澤市の橘地の養子と成つたのであります。回顧すれば生家養家共ども、淨土眞宗でありまして、皆な能く佛道を喜ばれて居られたのであります。處が私丈けが今日迄如何なる譯か、眞から念佛申す氣が起らざる計りてなく、別に何の心配にもなりませんでした。私の父は私の九才の時に死去せられ、十二才の頃まで母上の手一つで愛育せられたのであります。私の生家は、先祖代々村の用係やら、用水委員等の役を勤められたので、子供心にも人の爲に盡す事が、人生の一番よき事と考へたので、百姓家を捨て、筆算の業に従事する事になりましたのであります。明治二十六年入隊の時まで、石川縣稅務署に奉職、二十三年より二十六年迄の間、能登の飯田と申す處に在勤中、醫師にて佐野春庵と申さる、漢學の先生に、多少孔孟の學を教はり、親以上に可愛がられましたのは、何よりの仕合でありました。私は立身出世を神に禱り、十六才の時より徵兵検査の時まで、酒を口にせず、婦人と親まざる事を神に誓つたのであります。然る處明治二十六年徵兵検査の際、幸にも農家生れの私が、不思議にも名譽なる近衛兵に撰拔せられたのであります。之れ全く神の御蔭と信じ、何の考もなく自ら進て現役に志願し、其年十二月近衛歩兵第二聯隊へ入營したのであります。二十七年日清の役には上等兵にて出征し、軍曹にて無事凱旋、三十七年日露の役には特務曹長にて出征し、少尉に昇進せしも、武運拙なく負傷の結果、内地へ歸還の運命となつたのであります。日露の役、三十八年三月三日、奉天の戦に幸か不幸か敵の小銃彈で腦天を貫かれ、人事不省にある事、約一週間、

既に火葬になるべき等の處、忠實なる從卒立花竹松君の親切なる着護により、九死に一生を得て、今尙此世にあるは唯々不思議と申すより外はありません。今茲に衷心立花君の高恩を謝すると同時に、又無限大悲の鴻恩を感謝せずには居られなくなりました。

今申上げた如く、私の傷は尤も重傷の爲、戦地病院に居る事約一ヶ月、夢の如き心地にて内地に歸りしは、三十八年五月、赤十字病院内に收容せられ、故軍醫總監橋本國手、並に獨逸のベルツ博士の診察の際、橋本國手の御言に、君の負傷は迪も醫藥の力にて助かるべきものにせず、全く神佛の御助に因るものなれば、大に其點を喜び、決して不平を云ふべからずとの事なりしも、其時は唯空事の如く考え、何等感謝の念も起らざりしに、何たる幸福ぞや、今は廣大無限の御慈悲に觸れて、唯々難有く感謝の念に堪へざる様になりましたのも、皆之れ如來の賜ものと喜ぶ次第であります。そして私の身體は、迪でも素の如く軍人を、勤むる事の出來ざるを以て、三十九年十一月御思召により中尉に榮進の上、過分の年金と恩給とを頂き、退役の身となつたのであります。思へば私は九死に一生を得たる幸福もの、尙又戦地に在て戦友に誓ひし事も思出て、確き決心を以て今後は専ら廢兵、戦死者、孤兒の慰藉に盡さんものと思立ち、四十年の三月友人乃村少尉と兩人にて、軍隊酒保の雜食商人となり、其利益の幾分を廢兵院と陸海軍將校婦人會養所の孤兒諸君へ寄附の目的にて、先づ毎週一回宛御菓子等の寄附を爲し來りしも、乃村氏は既に四十二年限り寄附を断念せられ、私は今尙繼續致居り

しも、思の萬分一も其實が上らず、憂慮中不幸にも大正二年十二月より、軍隊の都合に依り、毎日の販賣が一週間一回の販賣に改まり、其の爲め私の事業に大影響を來し、寄附處か毎月莫大なる、損害を生ずるに立ち至り、又昨年の秋傳染病に冒され、店員中四人迄も「チブス」病に罹り残らず入院致し、又其上嘗て私の友人にて、或る會社を創立せし際、友人の德義上多少の株式を引受け居りしに、友人の無責任より會社は破産の運命となり、困窮の上にも又々其責任を果ざるを得ざるに立ち至り、重々の不幸にて、日々金錢の缺乏を來し、資財の限りを投資せしも尙足らず、去りとて誰一人眞に同情するものなく、友人知人に内情打明せども、五十歩百歩の咄にて安心も出來ず、又易學先生やら、淘宮術等の先生に就き種々研究せしも、根本的に安心の道も得られず、煩悶苦惱に日を暮し居りしに、又々チブス患者の内我兒同様に養成せし郷里の人にて、窪政好と申す今年十五歳の紅顔の少年に死去せられ、我兒の愛に引き比べ其の両親の心中を察しられ、唯何んとなしく此時聊か浮世無常の一點を味ひ、生死の巷に二度迄も此の身を捨て、大君の爲に盡さんと迄覺悟せし身が、斯の如き些々たる事に突き當り、何たる我身の弱きかと、始て知れる我心の頼に足らざるを悟り、斯の如き些々たる事に煩悶苦惱するもの、畢竟自分の欲を制する事が出來ぬからであると考え、自分の身に取て一番好きな煙草を禁じたのであります。多少悟る處もありましたが、迪でも自分の力で自分の萬事を制する事の不可能である事を悟り、其時進退谷まつて、始めて佛の助けを受けんものと思立ち、豫て聞き知る郷里の曉島

敏様に就き教を乞はんものと、小石川區の浩々洞に参りしに不幸不在にて大に落膽失望し、將に歸らんとすれば、如何なる御用かとの木場了本様の御言に、力を得て、佛道を聞かんが爲参りし旨申たるに、直に御座敷へ御通し下され、私の胸中を披瀝せしに、誠に懇切なる御話數刻を拜聴せしに、稍遠方に光明を認むる乎の如き感じはすれども、尙物足ぬ心地すれば、御親切なる木場様は夜中にも拘はらず、私を本郷の近角先生の御宅へ御連れ下されたのであります。

處が生憎先生は布教の爲め關西地方へ御旅行中にて拜謁を得ず、空く立歸り、其歸途木場様の案内にて、大學校構内の樹下に、夜の十時過まで、人生問題やら御法話やらを拜聴し、歸宅後も何んとなく尙物足らぬ心地したるも家業に追はれて其儘に打捨て置きたるに、何たる幸福か、其後木場様は郷里に歸られ、本年一月の年賀狀中に、確たる光明を認められし乎の御尋ねを受け、今更其の親切なる警告に驚き、一月七日豫て慕く思居りし近角先生の御宅へ参り、御面謁を求たるに直に、先生御自身玄關迄御出で下され、未だ何事も申し上げざる初對面の私に對し、第一に不自由なる私の身體を御覽し爲し下さるや、「ドーナサイマシタカ」との温き御言を懸け下さるのみならず、直に手を探て痛はり下されし御親切に感じ、其時既に我理想の佛とは、正に斯くの如き御方を申上る事かと信じられ、唯々有難く感じたのであります。招ねかるゝ儘に御座敷へ通れば、自ら座布團迄御出し下され、萬事謙讓の御態度と、其の圓滿なる御容貌に接したる其時は、傲慢不遜の私に在ては全く恥入り、始めて生如來に接したる如き感想

が起り、唯何んとなき慕情、益堪へ難くなり、此時私の胸中全部の苦惱煩悶を、先生の前に披瀝したのであります。其要點は、私は十數年間も軍隊に在て、専心奉公の念を以て動き、日清日露兩役には身命を陛下に捧げ、日露の役には九死に一生を得て今は廢兵、孤兒の慰藉に盡し居れども、理想の萬分一も其實績の揚らざるを憂たのであります。又友人其他のものに對し、今迄は充分に道を盡せし様に思ひしに、其結果概して面白からず、又私は前に之と云ふ大した惡事を爲せし覺なきのみならず、自分の今日まで爲し來りし事柄の全部が善き事の様に思居しに、何が故に斯の如く、不幸に遭遇せしかと疑問である事を申し上げしに、一々懇切に御教示下され、殊に先生の御身の上咄までも承り難有頂いたのであります。其時御示し下されし要旨は、第一自分が助かるべき筈のものなるに、他を助けるの間違である事を摘發せられ、第二私が善き事を思居りし事が、皆自己の爲なりし事を摘發せられ、今迄人を助けるとか、人の爲とか、己れが善き事が出來るとかを頼みとせし金城鐵壁も、今先生よりの御教示に依て、根底より破壊せられ、全く己れの立場を失ひ、今迄の萬事が間違であつた、心得違ひであつた事を御知せ頂き、其時よりの立場が一變し、此時既に空腹に食物を得たかの如き心地して、悠々として先生の許を退かんとするに當り、先生御自身より「信仰の餘瀝」を、求道雜誌一部を賜はり、其後拜讀の結果、聊か信仰の必要を感じたれども、心中より有難き念佛を唱ふる事が何んとなき恥づかし、且つ意味を解せざる念佛は自ら我心を欺く様に思はれて、唯何んとなき不愉快に日を暮し居し

に、二月十五日始て本郷の、求道學舎の道場に詣り、先生より佛陀の眞實の御法話を拜聴せしも、疑の雲晴れず、三月二十一日の土曜日に九段の教會場に先生を訪ねて、其後の心中に起りし疑點を申し上げ、親く教を乞ふたのであります。其要點は、過日先生より摘發して下された通り、過去に於ける私の爲したる所業を熟考する時は、皆な之れ全く己れの爲のみにして不眞實極まる點を自から覺醒し、大に慚愧に堪へざる様になつたのであります。又自己を捨て、眞實に他人を助けるが如き事は、逆ても私に於て爲し能はざる事を自覺せし時は、今までの事は、全部偽であつたかの如く考へられ、自分は言行不一致のものなるが故に、逆ても私の如きものが佛に助かるべきものにあらざると確信し、如何なる道理に依て助かるべきかを愈々疑問の中心となつたのであります。然らば私より念佛を唱ふれば、佛は私を助けて下さるのか、若しも助けて下さるものとせば、私より如何様に計てよいのかと心配でならなくなつたのであります。然れども私の如き何事にも不眞實勝のもの、何事も人並以上に疑心の深きもの、名譽心にあこがるもの、物質的に走り易きもの、半慈善的事業の癡兵孤兒慰藉の如きも、果して眞實なるかの點を顧み、且又清淨の身と成る事の出来ぬ此身は、逆ても助かるべき筈のもてないとい自ら斷念し、心中恐れを感じつつある事を、當日の法話前に先生まで申上げしに、意外にも其點が尤も可愛との如來の眞實である、本願である、汝の不實もの、汝の善き事の出来ぬ、清淨になれぬ其點が可愛のである。汝が眞實であり、善き事が出来き、清淨になれるなれば、斯の如く佛の方で苦むので

ないとの難有き御言葉を頂かして貰へども、尙も疑念を晴らす事が出来なかつたのであります。然るに利他眞實の御法話拜聴中、就中靈坂寺觀音利生記の澤市の女房の眞實に感じたのであります。勿論如來の眞實は、之れ以上であるが故に或は助けて頂けるかも知れぬと、多少安心を得て、教會場を退去するに際し、嘗て私を佛道に誘致し下されし、木場了本様の御在京たる事を知り、直に岡氏を浩々洞に訪問し、昨來の御禮を述べ、猶も法話を拜聴し、退出に際し、「清澤先生の信念」と題する一本を贈られ歸て一讀せしに、又々疑念續出し、此儘打捨て置く事の出来ざる様になり、三月二十八日の土曜日に、九段教會場に近角先生の虚假眞實の御法話を拜聴し、愈私の行爲一切が不眞實極まる事に裏書濟みなり、此上は愈々一秒時間も捨て置く事の危険を感じ、翌二十九日は家業の煩る忙はしきにも拘はらず、身上の一大事たる事を家内にも打明かし、取急ぎ本郷の教會場に詣り、法話前親く近角先生の膝下に於て、佛の誓願は如何なるものなるかとの某信者よりの質問に對し、佛の誓願は恰も砂糖の甘きが如しとの先生の御教示を頂き、本願の成立を詮議して迄も頂くの必要もなさかとも考へ、唯甘き本願の難有やと信ずればよいのかとも考へられ、何んとかく時機が切迫せし様に思はれたるのであります。

處が本日の御法話拜聴中如何なる動機の來りしにや、佛智不思議を信ずればの御言葉に氣が附て、ふと此身の非理屈者、強情者、今迄理屈で信ずる氣であつたから困つたのだ、自分で信ずる氣で居たのが悪るかつた、誠に濟まなかつた、此の淺間

しき私が隔て心もなくなつて、唯佛智不思議の有難やと信ずる氣になつたのが、之が佛智不思議である。眞實有難やと喜んだ其時は、夢の如く幻の如く、此時如來の方より能く親心を信じて呉れた、之れて本望である、安心である、決定である、金剛心を待られたのであると、耳底に響きし其時に、今迄大慈大悲の如來をば、恐れ多くも我々同様に、善き事をすれば助けて下さるのである、此方より頼めば助けて下さるのであると計り、信じて居たのが間違であつた事に氣を付かして頂き、眞に濟まなんだ、永々の間親心を疑て濟まなんだ、御心配懸けて相濟まなんだと、種々思ひ詰め、何たる廣大なる御慈悲かと難有く感じた一刹那、總身一時に火が付きし如く、俄に全身發熱し、熱き涙が押流れ、生れて始めての男泣き、外見も恥ぢず聲上げて泣き叫びたる其時に、大慈大悲の如來より、豫て汝が心配の、清淨になれぬ、善き事が出来ぬ、隔て心が止まぬ、不實が止まぬとの其事が可愛から、永劫の昔より永く苦勞して積上げた此の彌陀の本願である。決して心配には及ばぬとの難有御言に感泣し、唯不思議や、難有や何たる幸福の此身がと、喜び勇さんて貰ひ受けた金剛心は、火にも焼かれず水にも溺れず、私獨の専有物の難有やと思ひ立ち、其時出てし稱名念佛は、四十年來の迷の網の打切れて、今より阿彌陀如來の大御船に乗り出したる心地して、其嬉しさは筆にも書けず口にも言はれず、何にたとへんものもなく、眞實感謝の念佛を唱させ下さる様になりましたも、皆之れ如來の賜ものと思へば、今日の御法話も全く私一人が爲に御開き下されし様に思はれて、唯々感謝の念に堪へざる様にありました。回顧すれば日露の

役に九死に一生を得たるも、眞に佛の御蔭である事が信じられ、又昨年來些々たる人生問題に突き當り、目を醒して下されしも佛智の不思議。又一月以來善知識の近角先生に就き、親く御教化を蒙りしも佛智の不思議とは申しながら、海山も及ざる御鴻恩は、逆ても身を粉にして報するも尙足らず。何たる仕合せものかと、稱名念佛申す次第であります。又私を佛道に御誘致下されし木場様、曉鳥様に對しても、篤く感謝に堪へざる次第であります。之れも佛智不思議の有難やと感謝の念佛申す次第であります。

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

其後は久しく御無音に打すぎ御申すも御座なく候。借て昨暮御發行相成り候「求道」、先日より日々有がたく拜讀致し居り候處、其内の「三信釋」二河白道の、汝一心正念にして直に來れとの御佛の御勅命の處、誠に「難有く拜し候。父上様や竹藏爺にも此の處おきかせ申候處、皆々大に嬉ばれ、殊に父上は毎々先生よりの御親切なるお話にも何となくどこやら御心配の處見え、私も届かぬながら、折々求道や先生の御書取り出し、御不審の處申上げ候ても、なか／＼御がてんゆかず、父上も終ひには、私にこんな事をなほのかなどなげかれ候故、ともに如何にせば宜しきかと思ひなやみ居り候に、此の度の汝一心正念の處にて、今迄の御心配一時になくなり、此の頃にては毎日々々其の事申出されては御慈悲の程悦び居られ候。又竹藏さん時々参り、父上同様此の度びに實に悦び申候て、私に其の處讀みかせくれ申、幾度もくり返し拜讀致し居り候。併してこれと申すも皆な先生の御親切なる講話故と、父上竹藏爺より、くれ／＼も御禮申上候。竹藏どのに此の嬉しさのむねの内、ぜひとも先生に御目にかゝり、直き／＼御禮申上度しと、涙をながし悦び居候、先は取あへず御禮申上候。

河野たれ

雜

錄

癩患者の入信

第一區府縣立金生病院教誨 本多 慧孝

去大正元年の十月の慰霊祭に、近角常觀師の御來教があつて、多大の感化を與へられた後、種々な語り草もあつた。其中で最も不思議に感じたのは坂根吉太郎の入信である。それに就ては其當時、近角師へ進言して、坂根の病友栗下信策が信仰の書籍を購求して呉れと、母より買ふて来た遺物の一冊を襖の中より取り出して私へ托したことである、一寸其時の手紙を東京寺務出張所の桑門師へ内見して貰ふて、更に桑門師より近角師へ送つて貰ふと、一冊在中の書信を發信しておいた。が、其後、近角師の御宅へ參つて、其一冊在中の書信は同送ありましたかと尋ねて見ると、更に何も来ないとの事であつたので、更に桑門師に尋ねたが全く知らないとの返事。扱は郵便局の罪と、其取違、本病院を郵便管下とする武蔵小平局へ出頭して尋ねたが、一冊在中なその郵便物は、此局では責任がありません。夫は犯則ですとの局長の夫人が挨拶せられた。其時私は、でも夫を郵便局で没収する法があるか、犯則ならば料を取つたらよいといふと云つて見たが、更に要領を得なかつた。それで私は其次に東上した折、本郷の藤江分店から信仰の餘瀝だとか信仰問題談異抄だとか云ふ書籍を購つて来て、栗下につくつた。爾來、私は小平の郵便局は愈々も變だと云ふ色眼鏡を以て見ることゝなつた。

然るに大正元年も過ぎて、二年の秋立つ頃と成つてから、或時、事務出張所へ出頭したら、桑門師が「ヤツ、しまつたことなした。こつと机へ仕舞込んで忘れておつた」と云つて、前年、桑門師へ内見を願ふた一冊在封の書を見られた。一冊の紙幣は其儘に栗下の襖より出たものなることを語つて来る。そこで私は是が婆婆ちやと思ひ、且つは小平局へ對して疑つたことを大に愧ぢた。そして迷の凡夫には神通が無いから怎樣事が始はありがらである。是が大覺の御親から

照無し給ふたら、什麼に我等は哀れなものであらう。私は一度消滅した一冊を再び私の手に收めたが、直に御金に入用であつたけれど、是を世間の事に使用したく無いような氣持がしたので、何がなと思ふて保存して居たが、坂根や栗下等が娯樂としてある鮮腹會と稱する新派の俳會へ毎月懸賞を出してゐるから、是れ幸ひと栗下を呼び出して呉てやつた。蓋し栗下は是が母の遺物の金とは知る筈が無い。多分、今頃は此紙幣は再び箱蓋に附着して、竊かに病室十一室に彷徨してゐるであらう。是から思へば紙幣にも亦紙幣の宿業があるやうである。そこで、其節の愚言を此に寫してみよう。

謹啓、先般は御多忙御懇切なる御力誨に預り、精神上多大の効果を認め、從て又小生の教誨にも爾來信をおかるゝ様に相成、洵に佛光の御榮を感謝罷在候。常に役員及患者より宜敷御禮申し呉れと頼のまれり候。扱此に別封の（金一圓）因縁は以前に草津に入湯しをりし癩患者坂根吉太郎が、乃木將軍自殺の當時、自己の病苦の實に難堪ため、毎夜、監護人の居眠る深更に及んで、庭前の葡萄棚に縊死せんと、寢臺より窓を飛び下りんと致せども、餘りに疲勞しをる爲め、自己の身體が自由ならず、其内に監護人に見咎めらるゝなどして、其意を果さず。唯夫を残念に思ひ候結果、少々なりとも病氣快方して、自分の身體が自分で御程にならば、必ず縊死を決行せんと思ひ定めをりしところ、其隣の寢臺に居る同じ癩患者の栗下信策が、毎日一時、監護人の吉田安藏や、篤信者の土井清の肩に依つて、禮拜堂へ開法に出掛るのが羨ましく、一度は生前に聴聞も致して置きたしと、心ろあせれど、我身の全く動かぬのに諦めをりしものゝ、必至聽きたさに其病友栗下に、今日

は何と云ふ談であつたと尋ねては自ら歎びをり候。其内に不思議にも、去廿五日、身體が動くようにて、歩行は出来ずとも、人の肩に寄れば行かれさうに思はれし爲め、此日、同病室患者の葬式執行に是非參詣せん、遂に誰れ彼れの世話に成つて、禮拜堂に參り、勤行の初より棺前教誨迄聞きをり候處、其小生の教誨中「死の縁無量故、什麼な死に様をしようとも、未來は安養淨土へ助けられて參らせ頂ける」と申せし一言を聞くなり、非常に嬉しくなつて、參詣の戻りには人の肩にもよらて、自分獨りて、病室へ歸り、其後唯自殺の時期を待ちをるばかりであつた。其後、尙、念の爲め、隣の寢臺の病友栗下に向つて「實際、如何な死に様をして、往生は出来るであらうか」と、それと無く質問を蒐け候處、其病友は一言の下に「それは自然に死なねばならぬように、餘儀無く死亡して了つたのは、如何な死に様でも宣布からん。けれども、無理に自殺するなどは、如來の慈悲が徹底してをらぬからデヤ」と、大に反對の説を聞きしものから、終に去廿八日の御命日に、其病友栗下と共に禮拜堂へ參つて、普通集合教誨の後に残りて、此問題を私迄露呈致せし次第に候。最初は唯一應の理論とのみ思ふて私は「直に人生がイヤになつたら諦めるがよい。直に諦めたら死ぬには及ばぬ。大死一番、大に活動せねばならぬ。けれど、夫が出来ぬ私共故如來は大慈悲を以て救はせ給ふ、それで今世の事は總て前世の業報に任せて、此人生の苦ししい中にも、御慈悲を歎ばせ頂いては、今度の往生を愛樂するのデヤ」と、説き聞かせてをる内に、坂根は、遂に慟哭

して、「自分は今、實際自殺を決行しやうとしてをるものです」と、突然、告白を致し出して、前述の趣を申し候。此時、私も思はず貴ひ泣きを致し候。そして能く／＼如來の御恵みに預りける宿善の者にや、自己の不見を悟り、愈々御慈悲に夜を明けさせて頂いたように候。依て其翌日、其病友栗下も悲き運命にありながら、此信友を得たるを歡んで、先日慰霊祭に近角先生よりの寄贈として、一舎毎に分賦せし「求道」の廣告欄にある信仰の書籍を買ふて、それを以て病舎内に備む同病者へ轉讀させて、佛の慈悲を知らせたいとて、私を更に禮拜堂に喚びとめて申すには、「私も豫て此癩病の發生當時、郷里の鐵道と毒藥と縊死とで三度も自殺を企てたものですが、何時も未遂で、眞に死ぬにも死なれぬ私であります。が、愈々私が家に居りましたは姉も妹も縁づかれませぬし、其他、家業にも差響きますので國元を隠れて出ます時に、老母が私を村端の土橋迄送つて呉れまして申しますに、什麼に餓える事があつても出ずな、世間に御情の方があつて、おまへの葬式をして被下る時の薪代として、おまへの襟の中へ縫ひ込んでおいたと云つて、私へ饒別々に呉れしました大事の死金であります。が、最早、此金は病院の御厄介になりましては、其様、必要ありませんから、今、あなたに立やつて頂きて、此襟の金を出しますと泣き乍ら云ふて、解いて出したが、別封の金一圓の紙幣に候。渠は更に私迄其金を差出して信仰の書籍購求を秘密に願ひ候。依て小生に於て別に書直し、且つ別の金を以て御願申さんかと一時は思ひ候ひしかと、此書籍目錄の

紙や、此紙幣が渠の精神を表彰したる奇しき貴品として、何となく世に勝れて難有き靈光の染めぬきたる何かのように思はれて、いと尊く候間、昨日消毒だけは嚴重の上にも嚴重に致して無害の物と致し、現物を御送り申上候に就き、何卒々々至急御郵送御願申上候。敬具。

因に、萬一、郵税をこめて、尙殘金もあらば、歎異鈔の小本を御送被下度候。是だけは小生が求むるものにて、患者に施本可仕候。而て栗下へは、小生より其殘金の分を仕拂可申候。以上。

大正元年十月卅一日

却説、坂根は其後、蘭林遊戯の境に逍遙して、普通病室を去り竹舎へ還つた。數多の癩友は蘭基に將基に義太夫に芝居に浪花節に其徒然を自ら慰めてたるが中に、渠は専門に文學を修めた經歷もあるの、頻りに碧梧桐式の俳句を樂んで、七八名の同好者を得た。折々は舊派の發句連と運座と云ふのを共に催したりして、餘命を送つてをる。栗下は其俳句に於ては確かに坂根の門弟格である。が、何れも慈光に浴して念佛したることは同格である。茲に多恨なる坂根が飾らざる告白を得たから其一端を掲げて看やう。是には一般社會の健康人の未だ知らざる涙痕がある。

私共の現在に當りては、過去は回顧の種であつて、未來に憧憬の希望に更には無いと言つてもよい位である。人は現在に當りて、未來を望むが、然らざれば過去を懷ふ。但し未來を有する者は過去を懷はない。前途が希望の暗雲に鎖された時、人は唯過去にのみ活きる。固より現實を離れた時、過去

である。阿々。

私は草津へ行く途に、素人目に判る程の病勢ではなかつた。それだから風呂に入るの時の外は餘り遠慮と云ふことは知らなかつた。草津で灸治療をしたために顔が非常に見悪くなつた。忘れもしない明治四十三年の八月廿日の未明、草津を立て東京に出る時で、それでもまだ人に對し遠慮すると云ふ事に付ては窮屈に感じて居なかつたから、割合に平氣で茶店に寄つて慈んだり、晝飯も食つたりして、午後二時頃、應樂と云ふ所までやつて來ると、子守する娘達が二三人遊んで居たが、私の顔を見て早々家の中へ逃げ込んで行つた。其からは氣が退けて店に寄る勇氣は擯けて終つた。同所を通過して段々坂場の方へやつて來ると、向うから草を背負つて來る十五六歳の童に逢つた所が、二間計りに近付くと私の顔を見て、ベツと唾を吐き、大層厭な顔して過ぎ去つた。其時の私の心持と言つたら、兎ても皆へようの無い位不快であつた。それから六里ヶ原の茶店で憩ふたいと思つたが遠慮して物置の様な處で休んで居た。さうすると茶店では氣を利かして私の所へ茶葉を持つて來て呉れた。其時の嬉しさと云つたらなかつた。眞に地獄にも鬼ばかり居ないと思つた。それから端書を書いて十餘銀貨を一枚載せて置き、沓掛町に下つた。重なる記事を読せば、怎樣ものであるが、後に他の患者の話を聞けば、この位の事は毎日遭遇する小さな出来事だ、一朝小學校へ行き歸りの學生園にても逢へば、それこそ大變であるとの話であつた。であるからして、我々癩患者が如何に社會から壓迫されて居るかと言ふ事は、この邊からしても想像のつく事と思ふ。

夫から、坂根は此全生病院へ入院してからの感想に就て遠慮無いところを列記してたるが、其中でも、入院當時の感想などを誌す中に、怎樣事も云つてをる。

社會の壓迫から救はれて、當病院へ收容せられた當時の感想は、唯、感謝の念より外は無かつた。譬に「親船に乘つたやうな」と云ふが、正しく斯う言ふ時の心持ちを言つたものだらう。

院内の整頓と職員方の熱心と醫員の親切なる、只々感謝の言葉より他には無

は觀照の對象である。過去が其現在に在りし時に有した苦痛も哀愁も脱實した一種の幻像の如く唯美しい者となる。記憶の望遠鏡から覗いた過去は、何んとなく寂しい佻しい美はしきものである。六尺の病床に身を横へて、死の黒き影を望みて、一日／＼を生き行く私には、此の幽かなる寂しさを迎つて、思ひ出の昔を味ふより外に樂みかない。今の私には、過去は唯一の慰安である。枯木は固より自己の告白ではあるが、空想と想像とを交へた作り物語では無い。前にも言つた通り只今の私には過去が、唯一の興味であるからである。

私が一番最後に、父母の膝下を離れる時の感想を、抄し書いて置たいと思ふ。秋は恰度、明治四十二年の天長節過ぎてあつた。家族に送られて停車場へ三四丁歩んだと云ふ譯である。併し是迄も三度程公私の病院へ入院した。其時とは今度の感想は全く違ふ。

又日露の役に出征したけれど、其時は涙を押さへる丈夫の勇氣があつた。が、今回、郷國を出づるは、私の最後で、再び故郷の山河に迎へらるゝやうな事は決して絶無と承知して出た。であるから、慈愛ある父母の膝下を去るのには、悲しき涙が瀧津瀧の如くに下つて、泣き伏すのが別離の情である。然に私は、夫が左程悲しくも無く、又涙も出なかつた。そして後髪を曳かぬやうな憂鬱の思ひは更に無かつた。何と云ふボンヤリした事であつたらう。未だには不思議である。が、思ふに是は、發病以來、社會から受けた久しい間の壓迫と苦痛とで、我が體内の涙、否、水分が盡き果てて了つたのであるまいか。

それと同時に、私は私の意志の弱い事をも自白せねばならぬ。恰度、馬關海峽を東へ向つて小汽船で渡る時であつた。私は青い山の如うな大濤がうねつておる。其底は白く知れぬ大海原に鯨や鰐と遊び廻つて看たくなつた。あの波と波とに咲く白い花、あの濤と濤とで響く強い轟きは、私を喚呼して呉れる大同情の表現かと思はれた。で、時に飛び込まんとした。此時、船が動揺した。私は思はずテツキの手すりを持つた。今、是で飛び込めば都合よく死ぬる、と思つた其刹那、急に海の水は冷たいやうな氣がした。そして胸と臍とが戦慄してゐるのを覺へた。結局、愚那一瞬間に死と云ふ智は冷たいと云ふ情のために取つて了つたのである。それから下の關から大阪行の列車進行中岡山驛で鐵道自殺をやりにかけたもの、轟々たる響におちけ立つて、是も最早一息氣と成つて止めて了つた。水の冷さにすら決心をひるがへず私デヤもの、到底、自殺は困難

い。怎樣、待遇を尋うするもの、皆、聖代の御恵みの通りである事は言ふ迄も無い。別けても私は斯の感を深うする一人である。何故なれば、私は收容せられて間も無く重患に罹り、起居居も自由に出来なかつたのが四回、丹毒に罹つたのが二回。是を日に積れば殆ど七百日計りである。斯の長い間には一通りならぬ御世話になつた。是も今迄一通りならぬ苦勞をしたから人よりは感じが強いのであらう。或友人は斯うも言つた。君は病院へ這つて、餘り安心し過ぎたから、度々、大患に罹るのだ。つまり今迄緊張した心が急に弛んだ爲めである。からシツカリしなくてはならぬ。私も是を聞いて或は左様かも知れぬと思つた。併し安心したと言つても、それは壓迫から逃れた反動とした起つた一時的のもので、其境遇に馴れたら、また直ぐに不平と不満が起ることであらう。今記憶してゐる二三を書いて看るならば、

夏の最中に鐵石をも溶かさん計りの炎暑に際し、熱が四十度と昇つて着られる様な時、是を冷やす、氷が全く無かつた苦しみは非常であつた。それから又、午前中に洗滌を願つておいても、仕事の都合で午後になることがある。其様な時の待ち遠おさと云うなら何に譬へようが無い。實に苦るしかつた。是も外の事と違つて遠慮してゐるからである。今、一つは、男の看護人に便器を運んで貰ふ事が大層御氣の毒であつた。そして而も何が一番嫌しかつたと云へば、各看護人が親身も及ばぬ親切で、甲斐／＼しく面倒を看て呉れる事である。是は同じ癩患者同士の看護人なればこそと思ふ。そして、尙一つ怎樣場合に成つて力がましく思ふのは、本多教諭師が、常に訪問して病床の私共を慰撫して下さるである。或時も私が咽喉が痰のために塞がるやうで苦るしくてかなはぬので、煙草が一瓶飲みたいたと思つたけれど是を購ふ錢は無し、隣床の同病者に此苦痛を訴へたが、何れも同じ赤貧者であるから、是を酒保から購つて貰ふことができた。それを看護人が聞いて、菊の枯葉を庭から拾つて來て呉れた。私は喜んで是を葉巻煙草にして吞んだ。其味の變なことは一通りて無いけれど、何も吞まぬよりは増してゐる。是を本多教諭師は怎して聞きだされたか。私へ煙草の吸殻で、まだ一本の三分の二は残つてゐる「敷島」や「西洋葉巻」のを敷島の二十入の箱に一杯持つて來て呉れた。怎樣事より其他書籍やら色々心配を立て被下で、何時も難有い御恩恵を聞かして被下事であつた。此院は公立てであるから、立法主義の御統御ならんと既に諦めてゐた。が、其中で、此様

な宗教主義の温情が溢れてゐるのは、眞に地獄で佛と云つたようなものであらう。云々。

などと、私が臨床説教もし、慰問のため何歟と持ちゆくの
を大に喜んで居る。かと思へば又大に警告の中に怪かならざる
親切があるのがあり、又明細に院政上注告をして居る點が
列記してあるのや、各患者間の徳性の頽廢を歎いて居るのが
あるが、是等は之に略する事とする。

是に依て推察すると、實に多感なる者である。全く日々、私
が退ふて談をして視るに多感に相違は無い。と云つてゲト
／＼した神經的の様子は無い。どちらかと云へば毅然たる方
である。仲々に山が碎けても動せぬ底の風貌である。で、今
や院内で理想的方面の患者からは頗る尊敬せられてゐるの
である。是も偏に信仰が力となつてゐると思ふ。彼の常の言に
「私は師父の御慈悲で得たる理性がなかつたなら、この頑惡な
氣性で何をしてかすかも知れぬ。随分と不平や不満の胸の憤
火を其儘にしてゐては、屹と暴徒の隊長にでもなつたであ
らう。それが辛じて理性のために壓して來たものである。け
れど此理性が随分妖怪なもので、悍曲の方面の奸智となり下
ることが多いのは自分ながら知らぬことで、不安とも何とも
怖ろしいものである。それが幸に如來を信じ念佛することに
依て、突然、是が邪智である、是は惡行であると云ふことが知
れて、何時しか懺悔させて貰ふことのあるのは、偏に如來の
御守護によるものでしやう。是には何とも御禮の申しやうが
無くてす」とは、彼の告白である。實際、醫員の某も彼を評し
て、「彼に理性と信仰が無かつたなら仲々に怖ろしい奴ぢや」

身體の調和を失し、一步だも歩せむことを得ず、實に苦る
しくも約三年の間は覺て居たのである。

て、入院すると、早速、脚部手術を受けしは、其月の十日
(火曜日)であつた。然に今迄旅行をなさぬ私が、百五十里
を三日二晩、飲食もせず睡眠もせず以來たので、異常な熱
を惹起し重患九十日に及び、殆ど瀕死の状態と成つた。然
るに宿業未だ盡きませぬのか、晩秋に及んで少々快方に赴
いた。此間の病想は種々な方面から私の身心を刺撃して唯
苦痛を與ふるばかりであつた。私は此間にも此煩悶苦惱、
何とかして脱れようともがいたけれど、奈何とも仕様が無
い。頼みきつて入院した甲斐も無く、信賴の醫師は未だ一
人の癩患者を全治せしめられたことも無いと知つては實に
落膽の至りである。また四面皆他人であるが、同病相憐ん
で親切に至る所なきも、尙何處かに冷いところがある。
世俗に苦しい時の神頼みと云ふことを言ふが、私は最早
神佛を頼んで効あるや否やは疑はねばならぬやうです。何
故なれば、私は自分の苦しむところ、欲するところ、特に
神力に依て全治を蒙ると信じて、祈禱もしたが、何等の効
顯も無かつたからである。是は私ばかりではないらしい。
世間の多くが、恣横目的で神佛の力を妄斷して、結局、そ
の効顯が無いと自暴自棄に陥り、遂に神も佛も無い、天國
も地獄も無いのであらうと、果は嘲罵し愚弄するやうであ
る。是れ畢竟、疑信誤解して、其眞諦に昏いからであるま
いか。私も實は夫れであつた。

夫は兎に角、私は當禮拜堂に各宗の僧侶や牧師が出張し

とも言つてをられる。

次に此坂根を自殺からも救ひ、煩悶からも誘ひ出して、如
來の御前に坐らせたと云ふ年少の栗下が、落ちたる指に筆を
ゆはひつけて自書したものがある。是も怠慢なる私共を鞭ち
給ふ如來の一棒と感佩してをのであるから一寸此に擧げてみ
よう。

病床感想と吾が信仰の經驗告白

極めて悲しかりき御諒問も静けく明けて、大正三歳の新春
を迎へける。この年に御即位御大典を擧げさせらるゝとは
誠に無上の喜びである。

何等の善因あつてか、我は此得難き人身を享け人間界に
生れ、允文、允武隆昌の御世に遭ひ、僅か生年廿餘歳にし
て、此二大事に遇ふ事を得るは實に不思議である。唯、勿
體無いと申より外は無い。扱この佳節に當り、東本願寺全
生病院患者慰安會諸員各位は、例に依て本年も江湖諸彦の
深厚なる同情を迎へ、懽情溢るゝばかりの慰問袋を以て、
病床の吾等を慰撫し給ふ。此鴻恩に對し奉り如何てか感泣
せざらむ。茲に僅か病想を記して恩謝の辭とする次第であ
る。

回顧すれば、私は去る四十五年、盛夏六月の一日午前八
時、別れともなき故郷をば後に永く訣れ、晝夜兼行して同
月三日午前九時、本病院へ收容せられた。是より前、私は四
十一年三月七日に左脚をば燒傷して此通りに腐り落した。
又、右脚は本病の爲め既に毀損し終り、病勢頗る重惡して

親しく道を説くと聞きました時、私は意外にも、既に飽き
／＼したる神佛の教を再び聞いてみようかと思ひ立つたの
は實に不思議である。……今から思へば寧ろ聴聞せなん
だ昔が不思議であるが……。此時、私は多くの憐人には冷
笑されても、看護付添人の親切に依て、私は肩に負はれて
始めて禮拜堂に参つたは、恰度秋季慰靈祭で、近角先生の
御法話があつた。御法話の文々句々は一々記憶することは
できぬが、此時、私が今日迄、御親に對する心得の間違つ
てる事が解つた。そして實に申譯の無いことをして居つた
實に勿體ない事をしたと思つて、病舎へ歸り、白い蒲團の
ベツトで、獨りて思ふさま泣いて／＼泣きあかした。是よ
りは、何宗の御説教に限らず、鈴の鳴る度毎に歎んで負ふて
行つて貰ふては聽法した。併し病室より禮拜堂は、随分遠
いから、其半途へ來ると負ふて居て呉れる人の呼吸は非常
にはずんで來て餘程苦しうだ。實に氣の毒で堪らなかつ
た。だけれど不思議にも、此人が飽く迄、私に親切で晴雨
に拘はらず負ふて行て呉れる。風雨の日などは傘を傾斜し
て往來するので半身は濡れてしまふ。或日の如きは誤つて
傘を落して脚部を負傷せしめた不面目な事もあつたが、此
人は決して怒らなかつた。恣横風に病室では其看護附添人
が私を始終負ふては私を御參詣に出して呉れた。また此附
添人の暇の無い折は土井清君が、私を負ふては歸つて下さ
る事が度々であつた。……土井君は佐渡の生れの眞宗本
願寺派の信者で、豫て布咄出かせぎ中發病して其モロカイ
島に三年間收容せられた事のある人で、至極信仰の確固た

る上に徳行の人で、現に本院では兒童の保護者となつてを
あられる。私は世間にも怎樣人のあることを知らなかつ
た。是が我々同病者にあつて、此人が私を可愛がつて被下
事は實に難有いとも恐れ多いとも申様が無い。

嗚呼、私を斯く迄に手を盡し給ふ如來大悲の御廻向の他
力善巧方便は、私をして師に接せしめ、佛法の眞理難有き
事を聴聞させて被下たのである。今更思へば、私が病床に
瀕死の時にも、苦痛悶々の際にも、既に彌陀の慈光は
常に溫容に照護して居たのであつた。夫を私の正常の持前
の煩惱の雲が深き中にも、疑網に覆はれて居て全く信ぜな
かつたとは恥づかしいことである。

茲に思へば自分ながら面白い事がある。以上陳べた如う
な始末だから、禮拜堂で鈴が鳴ると、自分が行く事が出来
ぬから、譬へば兒供が何かいたづらをして柱に縛られた處
へ、母親が歸宅せられたやうだけれど、其腰へも其乳房へ
も御ふても行かれぬ囚れの身は唯泣くより外は無い。恰も
其兒のように、私は病床に自分の身の儘ならぬを恨み、果
は不平を醸した譯であつた。其時に、私は本多教誨師の御
下へ御届けしたのは、

鐘聞けば

千々に泣立つ

わがこゝろ

しばしな吹きそ

秋の山風

と紙に書いて人に傳へて頂いた。すると師には直に辱くも

一首をものせられて我を誨へ給ふた。

秋風や

鐘に波立つ

こゝろぞと

かこつちおなし

みひかりのうち

(大正二年十月五日)

何も禮拜堂に來なくても、其病床たる汝が枕邊に夜となく
晝となく一瞬間も離れず、正當におはしまして、汝
が種々に苦悶しをるのをば、絶對の同情と憐愍で、厭はず
飽かず飽まで其身を包擁して居て下さる。だから何事も如
來に打ち任せて、安心して静臥せよ、病を養ひよと懇に申
し下されたのであつた。其當時は却々解らなかつた。翌日、
師には親しく病床を見舞ふて慰撫して下された。今も其時
の狀が眼前に髣髴する。此一首をば幾度も／＼も取出して
御慈悲を味ふて居る、もう折目は摺れ／＼して斷れさうに
なつた。が、暗誦ばかりでは、怎うも物足らない、師が直
筆に接したくなるのである。實に勿體ない事である。

四十五年の大患以來は風邪に罹つたことも稀であつた。
身體が自然に恢復するに随つて、本病の治療にも専心に心
る掛けては居るが、佛法聴聞は知らず識らず人様の御蔭で
專念と續けさせて頂いて居る。其内に何時とも知らず。覺
なりしものが、怎うか悠るか、松葉杖に倚つて、禮拜堂の御
法話に御参りさせて頂く事の出来るようになり、日一日と
如來の慈光に圍繞せられつゝある事が、一段一段と明瞭に

味はさせて頂くようになった。師の恩の忝けなき何と御禮
の述べようもない。

是と同時に、私は此の「我」と云ふものゝ、些の價值も無
く、そして唯罪惡のみ造りてをる。それが總てを他より享
有しつつ在り乍ら、自分の一存や自分の腕力で作り上げた
やうに妄信して、御親の御恩は忘れて了ひ、勝手氣儘の事
のみをして飽きもせず、實に穢惡汚染の淺間敷き此の身で
あると自覺させて頂き、其日その日と暮して行く事の出来
得るのは、要するに無量壽佛が永劫に間我等の爲め難行苦
行なし被下れて、攝取不捨と救はせ給ふ不可思議力と、難
有く喜隨し奉る次第であります。南無阿彌陀佛。

大正三年二月十一日

栗下信策

右は去る紀元節私に披見して貰ふ積りて認めたものであつ
たようである。が、折悪しく其意を達することが出来ず。其
後一瞥をして呉れと、私迄差出したのである。此栗下は既に
癲病のため肩部迄神經を犯され、筆をあやつる事が叶はぬの
で、手のひらへ筆をくゝりつけて書いたものである。

渠は、昨二年十一月廿八日の御正忌に報恩講を禮拜堂で勤
めてから、第一回の歸敬式を多くの人の中から唯一人拔擢せ
られて執行せられた、信德兩全の模範患者である。法名は本
山から「善聽」と賜つた。其後、本年三月五日附を以て、本山
から土井清と此の栗下信策とへ聞法篤信の旨を以て念珠一聯
つゝを褒賞として賜つた。眞に是等の人々は精神的にも、物
質的にも、所謂、心身共に窮して道達した妙境界の最勝人て
ある。

(大正三年三月十五日稿了)

拜啓、寒さきびしく候へ共、先生には御障りもなく、御傳道

に御多忙の御事と察し上候。扱昨年夏御來縣の節は、一方な
らぬ御化導に預り、何とも御禮の申上よふも御座なく候。尙
多度津九尾様御宅にては、親しく御話うけたまはり、其御言
葉實にうれしく佛の親心をお知らせ下され、さても／＼廣大
なる御慈悲なるかと御恩をよろこびあり候私十八歳になる一
人の男子あり、本年三月中學卒業後は、帝都に遊學せんと
存し其時には同行いたし、先生にも御面會いたさんと相樂し
むかひもなく、昨年十二月廿二日より盲腸炎におかされ、病
中の苦悶見るに堪へられず、充分なる手當も致せしかど、終に
去る四日死去致候。力とたのみし愛子に死なれ、そのかなし
い苦しい心の底をお見知り下さるは只如來様と念佛申外御
座なく候。生者必滅會者定離とはかねて承知しながら、今更の
ごとく存し候。佛の御慈悲なかりせば、のこりし身の一日も、
送りかねるものを、私の心中を察して同情の涙をたれさせ給
ふ佛になぐさめらるゝ身の仕合せをよろこび、朝な夕な佛と
共に日暮しの出さる事の返す／＼もうれしきかぎり候。い
つもなれば正月は心もいそ／＼いたし、あまり念佛もうか
ばぬ時なるに、本年は愛子に分れしおかけにて、けだいかち
の私も早々より御稱名相續をさせていたゞく事を、一層よろ
こばれ申候。佛様の御恩をよろこぶと共に先生の御恩のふか
き事を感謝いたし候。拙なき筆もて失禮をかへりみず御禮旁
、右申述度かし。

南無阿彌陀佛／＼

田中律子

ふことが何うしても届か無い。そこで私は「今貴方は斯う思
て居らるゝであらう。早く金を持って國に歸り度いと思ふて
所へ、私が斯ういふ話をするのだから、厄介千萬と聞て居ら
るゝに違ひ無い。然うでせう」と申したら、初めて其方は自分
に隠くして居る處を私に言ひ當てられたものだから、氣持ち
が悪くなつて來たと見え、「へー」とびつくりせられた。して
言はれるには「今迄あなたは口ばかり巧い事を言つてな。さ
と思ふてたに、心の底迄言はれるから、氣味悪くなつて來
た」と申される。そこで私は「それは私が見抜くのてない、佛
である、佛は我々が此の世の上に色々の考へを抱いて惱み苦
しんで居る——之を一口に言つて仕舞へば、我々の心の上の
借金だ、心の上の缺乏である。我々が其の抜く可からざる心
の上の借金を負うて惱み苦しんで居る、夫れを見て如何にも
苦しからうと、其の同情の上より現はれ下された其の同情の
塊りが佛である」と斯く色々に話すと、其方は全く感涙に咽
んでしまつて、終ひに喜びの人となつて下された事でありま
す。

七 或御夫人の喜び

るが、一つと言ふと、之は昨日も参つてお話し仕て來た事であるが、或る身分ある御夫人の方で、今年廿五歳、近頃結婚せられたばかりの方であるといふ事になす。急に肺炎に罹られて、月中位であるといふ事になす。居るのてあります。人から見れば境遇としては、先づ満足せなければならぬ地位の方であります。二人の看護婦を傍に置いて、自分の危篤である事も知らず、「病氣がよくなつたらあの着物を着て三越へ行かう」など、言つて居らるゝ。其の着物を着て行かうと言つて居らるゝ。其人が、今月中に死んで仕舞ふ運命に在る人ではた

の者は御氣の毒で見て居られぬ。いくら富みて、之ばかりは仕方が無いのであります。其處へ参つて私は昨日お話しした問である。我々此の世にある上は、死といふ事は免れぬ。人親様も助け度いと思召し下されてあるのてあるが、業報の時に至つたものなら何とも仕やうが無い。いざとなると仕やうの無くなる其の者故、其の者が可哀相で、かねて待ち受けるにあ

る深い慈悲が、佛である、如來様でありませう」とお話しした

ら、涙を流して病床で喜んで下された。之れ迄何程きいて

其處迄は思ひ至らなんだに、今の御話が腹に這入り、もう何時死んでも不足無い」とお喜び下された事である。

八偉大なる一念

内儀とて前には死なれ、此の越前の方、九段に連れて來られた御
 した夫に死なれた人である。それが一寸とした御縁で、ひとり暮
 て立てゝ來られたといふ。唯夫れ丈けの事である。が夫れ丈けて
 話を一聽いたしたといふ。唯夫れ丈けの心中を察し、可哀相と
 自分がこんなな獨りて苦勞は如何にも有難いことである。之が
 言うて下さるお慈悲と起つた。唯夫れ丈けの事である。之が
 斯ういふ一念がある。唯夫れ丈けの事である。此の一念が實に
 偉大なものであります。唯夫れ丈けの一念は、我々の惱みが如何に
 深くとも、其の惱みを滅し、溶かして下される處のお力をあ
 る。人生上如何に困難であらうが、逆境で有らうが、夫れを
 飽く迄お恵み下さる處の徳を、其の一念に私共は頂くのであ
 る。實に此の一念の上からは、如何な苦しい處もお恵み
 一つの故に我々は満足され、又死後も其の恵み一つに導かれ
 てゆく事が出來るといふ、偉大なる力であります。

九一念の信徳

て其の内儀さんは、「之は如何にも有難い事である」と思つた。家に歸つて行つたら、第一に弟が見てびっくりした。「あな
たの顔色は如何にも嬉しさうだが、道て何か金でも儲つたか
といふやうな話、イヤ別に何か嬉しい事でも有つただらう」
んなにニコ／＼仕て居る。夫れ迄は左程にも無つたであらう」
ども、然う言はれると、夫れ迄は程々嬉しくも仕やうが無い。金も
何も儲つたので無けれども、彌々嬉しくも仕やうが無い。金も
して下さる。今迄はあれは可かぬ、之は可かぬと、不足にば
かり思つてたけれど、今日は何か妙な事を聞かされ、あち
らを見ても此方を見ても、嬉しくて／＼て叶はぬやうになつ
て仕舞つた。どうも家の者は皆なびつくり仕て仕舞つた。丁
度其處へ息子さんが歸つて來た。息子さんは六貫目もある針
金を脊負つて、自轉車で途て倒れて、提灯も何も滅茶々に仕
て歸つて來た。そこで「お母さんは有難い／＼と言ふけれど、

私は自轉車で引くり反つたぢや無いか、何が佛などが有難い事あるものかといふと、内儀さんは一も前六貫目も有る物を奢負つて轉げて、若しか下になつたら死んで仕舞うぢや無いとか、それが御かげで提灯位で言へんだから、有難うぢや無いから、物も見やうて何うのにも言へん、自分丈け轉げたと思へば腹前にどん／＼やうて行くのに、動もすると身體から潰れてしまはなければならぬを、提灯一つですんだと思へば、こんな難い事は無いのであります。

一〇 大風吹いて桶屋喜ぶ

之は皆機考へて御覽なさい。世の中は心の持ちやう一つて面白くと思へば面白く、こんなに朝から晩迄働いて、詰らぬと思へば詰らぬ。思ひ出したが、皆さん「大風吹いて、桶屋喜ぶ」といふ比喩を御承知であります。大風が吹くと大變芥がたつ。芥がたつと盲目が出来る。盲目が出来ると善女が澤山出来る。猫が三味線が賣れる。盲目が出来ると猫の皮が澤山出来る。猫がいなくなつて鼠が殖える。そこで鼠が桶を噛入るから、桶屋が喜ぶ。斯ういふ話であります。廻はり遠いけれども考へて見ると私共が一寸電車に乗る。電車で一寸方があいてますからおかけなさい」とても一言言はれると「有難うございます」と言つて、甚だ氣持ちがよい。家に歸るにも今日歸つて來られるいふ愉快な事が有つたと思ふと、頗る氣持よく歸つて今日は御馳走を取つて置きましたよ」と言はれるやうになる。電車で一寸席を譲られたのが、それが及ぼし／＼て自分始め、家の者迄「今日は嬉しうだ」と喜ぶやうになる。それが、逆に行くと、電車の中で妙な奴と喧嘩でもする。家に歸つて猫の頭を毆つた、といふやうなことになる。物といふものは、ひとつ物でもそれが可笑しければ、設へば茲に電燈風吹いて桶屋喜ぶといふと可笑しければ、鬼怒川の水が流れて、鬼怒川の水は、因は鬼怒川の水にある。鬼怒川の水が流れて機械を廻はし、それから電氣が起る。物質上にしかか

一一 信御上より顯現する人生の意味

處で一體言ふと今の話は、所謂修養といふ方におち易いのである。夫れだから人間は心得が大事である、自分から満足し、人にも善く仕て行かねばならぬ、となると自力修養であります。處が人間は此方から善く仕て行けば、必ず向ふも有難い受けて呉れるに限りぬ、折角善くして居つても、相手恨みとなる。茲て何うしても他力といふ事が起つて来て、偉なる恵みによらなければ、私共は救はるゝ時が無いとなるのであります。處が我々は昔から、偉大なる同情に接してながら、夫れを弾き返して、自分勝手にあゝぢや斯うぢやと、種々苦勞して居る。夫れが即ち人生といふ處なのであります。其處で其人生に於て我々彌々最後の眞の満足は、先きにも言ふ如く、物質上の寶で無ければ金でも無い我々の心に在る。今日は種々の問題が有つて、或は之を物質上より、又は社會上より解決しやうとするのであるが、夫れに伴ふ根本は互の心の思ひ遣り、即ち銘々が互に察し合つて心を一つにして行くといふこの一事が解決されなければ、眞の精神上の満足は見出されるもので無い。其處で其の心の上より銘々が一致してゆけるといふ根本は、銘々が自分を捨て、人の爲に盡すといふ、所謂敵を愛するといふ一事にあるが、まことに結構なれども、此の一事がもと／＼にらみ合ひの人生に於て逆も行はる可きもので無い。忽ち相手が、と考へた一念に於て行詰まり、思ふやう動かれなくなつて仕舞ふのである。處が其の思ふやうならぬといふ其我々の最後の苦しさをかねてより知り抜いて如何にも夫れが苦しからう夫れが哀れて飽く迄汝を見放さぬとある恵みの塊が、實に佛の親様でましますのである。て此の思ひに任せぬ、仕て見やう無き世の中に、その汝の苦勞が止まぬ心中が可哀相でならぬのだ、といふ此親心を頂いて味の上からは、先きの内儀さんの如く、夫れから夫れと今迄不足とし、憂苦として居た事柄の凡てが意味一變し茲に全く人生の光景が一轉して来るのであります。夫れ故結局人間は人生の人生的幸福を以て決して満足す可らず又逆境にありても悲觀す可らず、其處に遺る瀬無く見捨て給はざる廣大の心があつて、其大慈大悲の有難さ一つを頂く事が、人間唯一眞實の至幸満足となるのであります。(二月廿三日、杏林舎に於て)

求道講話概況

求道學舎 (聽講 甲記)

三月二十九日 快晴。庭前の櫻樹に三分の紅を呈し、春色之れより將に酣ならんとす。定刻講話開始。講題は「往生の正因」なり。歎異抄に「他力をたのみ奉る惡人もとも往生の正因なり」とあり。此味を深く頂かればならぬ。抑も我等世間の道より云へば、善は飽迄之を行ひ、惡は必ず之を避けねばなるかと考へ、又信仰の上より云へば、信ぜればならぬと思ふのである。然るに實際となれば、せねばならぬと思ふことが出来なくなる。又人生上に於てもあるにありたい、このようにありたいと思へども、中々思ふ通りにならぬ。かく並べ立つれば限りなき事なれど、結局人の苦しみ難は只一つで、方角は皆自力である。但し未だ此等の事が一も出来ぬと突き當らぬ人もありて、まだどうにかなるやうに考へて居れど、實は皆出来ぬ。そこで往きつ戻りつして居るのである。茲に於て我々には次のやうな考が起る。若しや若し、こゝに一人の人ありて、なるほど汝の何一つ善く出来ぬ處が可愛想である、同情を表して呉れる人があつたら、我々は最早自分の善くなることは望まずして、たゞ其人の同情親切に融かされて、全身を打ち任すことが出来やうと、こゝ考へて来るのである。然るに佛とは實に此絕對の同情者に在したのである。佛が本願を建て、往生の正因として呼んで下さるのば、實にかくの如き善き事の二つも出来ず、惡しき事の止め能はぬ我々に向つてである。通常善きものは救はれ、惡しきものは捨てられる、があたりまへなるに、我々の到底如何ともしがたき惡いところが可愛想である、それが見捨てられぬと云ふ御慈悲は實に只事でない。されば我々が一念この御慈悲に氣付かせて頂くとさば、最早我々のいゝわるいは問題とならずして、たゞかゝる惡人を見捨て給はぬ御慈悲一つを喜びて日送りさせて頂くことが出来るのであると、所謂惡人正法の深意を述べ猶々も此御慈悲を軽く頂き、惡いものでも

助かる心にきめ込むことの誤りなることを説き諭し給ひぬ。講話後の信仰談話會亦かりき。先づ一老女は「私は私の罪を如來が預ると申して下さると承はりて、すっかり安心させて頂きました」と。これに對して先生は「それよりも其惡い處が可愛想で見捨てられぬとの仰せを聞かればならぬ。それで、あなたば、他人から惡しくせらるゝときに、こちらは却て先方をよくしてやる、ことが出来るか、所謂敵をも愛する事が出来るか。信仰はたゞ自分が惡い／＼と引き込む計りにあらず、その惡い處を飽迄見捨て給はぬ御慈悲に満腹させて頂くときは、自ら他人の如何なる罪をも容しうるに至る點が有難いのである」と、我等に對して實に頂門の一針を施し給へり。又某氏は嘗て軍人として日露戰役に出征し、危く一命を助かりし以來、深く感ずる所あり、身を挺してさる精神的事業に従事せられしが、か程迄にせられても猶自己の心の低り多きを歎き、過般來九段並に當舎へ來聽せられしが、宿縁や催しけん、今日の講話中、當り前ならぬ御慈悲との一語に深く感動せられ、この惡しき私をかほど迄に思召し給はる本願の不思議かと、今迄泣くといふことを知らざりし氏が、今日は潸然として涙禁じあへぬ様、如何にも尊く、一同袖を沾さるはなかりき。(本號告白参照)

四月五日。半晴。櫻の花の眞盛りなるに、昨日は怪しくも空曇り風寒く、遂に雪さへ降り出て、今日は晴れたれど、雪解の水の軒端に滴る音いと高し。一日より五晝夜、稲田の御坊にては宗祖聖人六百五十年の御遠忌法要を営まれ、先生請を受けて出演し給ひ、二日には同朋十二名亦參拜を遂げらる。されば今日は恰もかの御法要の大連夜に當れるを以て、先づ稲田に就いての種々の感想をのべられ、而して聖人が稲田に於ける御苦勞の中心は、申すまでもなく「教行信證」の御製作にありとて、特にこの聖典の尊き箇所を擧げて讃嘆し給ひたり。

四月十九日。快晴。先生は去る六日より越前に旅行せられ、十五日には歸途郷里御親戚の中陰法要に參詣せられし爲、講話は又一回缺くることとなりぬ。扱て四月十一日には、皇太后陛下御崩御あらせられ世に再び悲しみの雲に閉されぬ。されば今日の講話には先づ先生が旅行中の悲報に接し、東都に入るに及びて一層哀痛暗黒の感に打たれし事を述べられ、此れにつけても吾々は信仰を味ひ、佛の慈悲によりて生死を超えて安心させて頂き、御慈みを喜ばせて頂くより、故陛下に對し奉り報恩の至誠を運ばせて貰ふことが大切なりと諭さる。次いで「慈光ばるかにてらす」と題しいつも同様の事なれども、佛の御慈悲を頂くに

就いて、肝要なる點を旅行中に起りし著し事例の上より述べんとて、先づ此度京都の某氏を訪問したるに、この人は今迄さる人を深く信じ居たるに、遂に飽きて然する能はざるを發見して大に失望せりと語られたるに對し、予は貴氏が人を信ずる能はざるに至りしはさる事ながら、かくて失望して、貴氏自らも又先方を捨つるに至りし貴氏は、又果して正しといふべきかと詰りしに、この人大に驚ける色あり、誠に予が正しからず、予は今日初めて、己が身の惡さを知らしめて貰へりと喜ばる。予重ねて曰く、「たゞ惡しさを知らしめて貰へるに非ず、近頃かやうの考を抱く人多けれども、更に一步を進めてその惡しきものを見捨て給はぬ御慈悲を頂くことが肝要なり」と、かくて此人漸く佛の慈悲に攝せらるゝ身となられたり。又或人は予が「佛は我々の不治の片輪者なる處を」しは解かしますなり」と説きしをきいて、「私はどうも未だ自分が其片輪者たることが知れませぬ」と歎かる。或人則より「貴氏は自身の片輪者であるに氣付かぬと云はるれど、我々が氣附く氣附かぬに拘はらず、本來の片輪者なる我々を大慈悲の御目を以て、眺めて下さるゝ親の御心は如何ばかりいぢらしと思召すことであらうか」と申されしに彼人は廣大なる大悲を頂きて、感泣せらるゝこと限りなかりきと。この他多くの尊き御話ありたれど、一々詳記する能はざるを遺憾とす。

四月二十九日。快晴。楓の若葉うるはしく萌え出て、開放たれたる講席に緑の影をさし込む様いと心地よく、正面にばさびやかなる八重櫻を挿されたり例對開講。今日はあまりの快晴故にや、聽衆常に比して稍少し。「淨邦緣熟」と題して、淨土の緣熟して、調達、閑世をして逆害を興ぜしめ、濁世機あらはれて、釋迦聖提をして安養を選ばしめ玉へり」の文、及び「遠多閑世の惡逆によりて、釋迦微笑の素懷あらはし、華提別選の正意によりて、彌陀大悲の本願を開闢す」の文の深意を述べ、觀經の御說法のいかにも「尊きことを讃仰し給へり。それ等の御話したる佛の御慈悲を信仰する外なきことを述べ給ふ際、すべて、人間同士の問柄にても、他の限りなく親切を盡くさるゝに對して、こちらに只ありがたしと受けるのみにて一々かやう／＼の筋合ひへ先方の親切を有難く思ふのであると、理窟づめに考ふるに非るはもとよりなり。今眞實佛の御慈悲の聞えたるも亦此の如く、佛の御呼聲を一々自分の心に思ひ築きて、扱て漸くに御親切を喜ぶと云ふが如き廻り遠きことに非ず、あゝ私は何も申させぬ、此惡い私をかくまてに思召すことの有難や」と、喜ぶのであるとの御示しは、如何にも尊かりき。猶

第二求道會 聽講 乙記

當日の講話の前半は、多年聽聞に心かけられたる一老女が現に大悲にかゝりて、餘命旦夕に迫るに及びて、煩悶憂惱限りなく、病床を訪れて因縁ごとゝあきらめられよと慰めし同行に對し、目を瞠らしてこれが因縁ごとゝ思へやうかと歎かれしを、かの同行の今日當舎に參禮して、訴へられたるを緣として、我々は此老女のごとく平生如何に法をきくとも、肝心の佛の慈悲を眞實にたゞく非ずば、愈々の場合にのぞみて、平生の聽聞の決して用立つものに非ること、又信不信の違ひは、かゝる場合にのぞみて、愚痴妄念の起るは少しもかばりなかるべきも、眞實に御慈悲を頂きたる人は其下より彌々御慈悲の有難く其の愚痴妄念を放して喜ぶことが出来る丈の相違あることを力強く説示し給ひたり。今日は月末の日曜なれば、講話後、例によりて信仰談話會あり、本所の一夫人、從來佛の教へには少しも縁なかりし人が、去年の暮某氏のすゝめにて、九段に一席の講話をきいて、頗る信念を開發し、爾後、喜びを續けせらるゝ心のあを告白せられぬ。

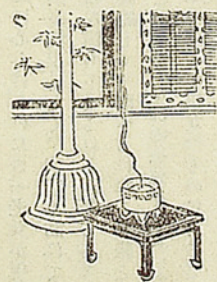
四月四日。寒氣甚だしく、時ならぬ雪大に降る。此度親鸞聖人の御遺跡稲田に於て六百五十回の御遠忌法要、先生は去る二日求道會の同朋十三名の方々を伴ふて參詣せられ、今朝まで傳道せられたり。本日の講話は傳道中の所感を追復して、開山聖人御一代の廣大なる御教化を讃仰せられ、御自督の法味極まり無かりき。其の要旨に曰く。此度稲田參詣中、御遠忌のこととして殊に深く御開山の禪房に於かれて、一代の心血を注いで選述せられた眞宗根本の聖經「教行信證」の大體が心に浮び來つて深く感じた事である。此の書の書き始めなる總序に「竊に以みれば、難思の弘誓は、難度海を度する大船、無碍の光明は、無明の闇を破する慧日なり」と、御慈悲の最も有難いところを示され、書き方に於ても實に力を込められてある。誠に如來の本願は到底助からぬ者を助けて下さる教である。次に「しかればすなはち淨邦緣熟して、調達閑世をして、逆害を興ぜしめ、淨業機あらはれて、釋迦聖提をして、安養をえらばしめ玉へり」とあり。調達即ち提婆が阿闍世王をして逆害を興ぜしめたる如き逆惡が起つて來たれば、これを救ふ淨土の教が現はるゝ機縁が熟し、華提希夫人が苦しむ憫んで安樂淨土を選ばれた。人間の惡い處が現れて來つて如來の教でなくては救はれぬ様になり、淨土の教が現

はるゝ時期が来たのである。そうして是が聖人御自身の御悲嘆である。自身が即ち阿闍世である、人生に諸の逆惡が起つて、如來の御慈悲を頂くべき時が来たとの仰である。『教行信證』後序に曰く、「ひそかにおもひければ、聖道の諸教は行證ひさしくすたれ、淨土の眞宗は證道いまだかんなり。しかるに諸寺の釋門、教にくらくして眞假の門戸をしらず、洛都の儒林、行にまどひて邪正の道路を辨ふることなし」實に七百年の昔に於ける御開山の仰を吾々が今日の世の仲にそのまゝ頂くことが出来るのである。親經の御説法にある如く草提希夫人はいふ「苦しみ極まつて釋尊の教を乞はれた。其時世尊は黙つて眉間の光りを放ち、光明のなかに十方淨土を現はし給ひた。然るに草提希夫人は澤山の淨土のうちで阿彌陀佛の國に生れ度いと願ひ、即ち如來の本願を頂かれた、その時世尊即ち微笑したまへり。阿彌陀如來が極樂淨土を建立して下されたが大經の選擇であつて、草提希夫人の正意が親經の選擇である。そうして如來本願の大悲をいふ「我々衆生に届けたまふ深義を示したまふ處である。實に人生に苦しみが現はれて佛の御慈悲を頂く様になつた。これを親覺聖人が頂かれて教行信證に書かれたのである。更に曰く「つゝしんで淨土眞宗を案するに、二種の廻向あり、一には往相、二には還相なり。往相の廻向について、眞實の教行信證あり」淨土論に一心五念を説く。然るに親覺聖人は行と云ふことを最も嫌はれる。聖人は他力の大行と言ひて佛の恵みの方に行を持つて行かれてある。行が即ち南無阿彌陀佛の恵みである。従つて御慈悲を頂けば念佛を稱へる様になる。そうして五念門の行を皆如來に持ち行き、願力成就を五念と名くと仰せられてある。如來の方に持ち行く此の思想から如來の廻向と言ふことが出て來たのである。

四月十八日。先生は去る五日御出立以來越前、江州及び京都の傳道を終へて歸京せらる。此度の旅中國家の大悲痛事があり、着京して始めて國母の御側に歸れる心地し言ふべからざる淋しさを感じとて「悲母憐愍」の題につき講せらる。他力の教の上にては釋迦彌陀は慈悲の父母とあり、釋迦の慈悲を父に喩へ、彌陀の慈悲を母に喩ふ。他力の上で阿彌陀佛の御慈悲を母に喩ふことは實に味が深い。父の慈悲も母の慈悲も離りは無いが、悪い者を厳しく戒めて下さるが父の慈悲であり、悪しき者が見捨てられず、悪しければ悪いほど哀に思召し下さるが母の慈悲である。口傳鈔に抑止は釋迦の方便なりとあり、抑へる爲めの方便であるが悪い事が止まない。然るにその何れの行も出来ない者に稱へさせてお助け下さる。

る權御成就下されたが南無阿彌陀佛の御慈悲である。そうして此の選擇本願を自身の爲めの本願であると頂いた時に御慈悲が頂けるのである。多くの人が人生の苦しみ極つた時信仰に入るより、自身は罪惡の者だと思へず、煩悶しないから信仰が獲られないと思ふ人多い。然し是は誤りである。悪いのを悪いと思はず、片輪を平氣で居るので親は一層不憫で仕方がない。御慈悲を頂く處は突き當つて居ると否とに拘らず、悪い者を哀れに思召下さる佛の御慈悲に氣附いた時信仰に入れるのである。

四月二十五日。題は「他力の大行」なり。南無阿彌陀佛の念佛は佛より我々に與へたまふ他力の大行である。是が甚だ意味深きことなり。親覺聖人は「教行信證」の「行巻」に曰く「つゝしんで往相の廻向を案するに大行あり、大信あり、大行といふは、すなはち無碍光如來のみ名を稱するなり。この行はすなはちこれらも／＼の善法を攝し、もろ／＼の徳本を具せり云々」佛の力にて佛の境界に生れさせて頂く、其の如來廻向は南無阿彌陀佛を稱へる大行と、佛のお慈悲を信する大信とあるとの御示してある。親覺聖人の教は常々頂く如く佛の恵を頂く信が肝心なりとの御教化である。然るにまた明かに念佛を稱ふことを仰せられてあり、行巻には始めから終りまで道理々窟無く念佛のことが書いてある。是は何故か選擇集には念佛は如何なる道ても助からぬ者を助けて下さる爲めに御成就下されたが念佛であると説き下されてある。法然上人の此の御教化を聽いて親覺聖人は何れの行も及ばざる自分を遣る瀬無く思召し下さることの有難いと頂かれた。故に南無阿彌陀佛一つが現はれて下されたのであつて、まだ稱へるとか稱へぬと云ふことない。即ち他力大行の念佛である。南無阿彌陀佛一つと云ふことが實に有難いことである。親覺聖人が頂かれる處では法然上人が一代説かれた事は念佛一つであるのみならず、如來の廣大な御慈悲の教見てが唯南無阿彌陀佛である。云々。



求道會報建築寄附

金第拾回報告

(四月中旬マデ)

一金七拾圓也(第五回) 福岡土曜會殿

内譯

金參拾圓也

福岡

谷はつ子殿
同はる子殿
同てる子殿

金拾圓也

同

金五圓也

同

金五圓也

同

金五圓也

同

金五圓也

小倉

金五圓也

熊本

金壹圓五拾錢

同

相垣ひで子殿

金壹圓五拾錢也 同 平田きよめ子殿

金壹圓也 同 森田うめ子殿

金壹圓也(第貳回) 同 守田たき子殿

一金五拾圓也 京都 川越直三郎殿

一金五拾圓也 旅順 藤井專隨殿

一金參拾圓也 福岡 麻生太吉殿

一金貳拾圓也 ロンドン 根尾克己殿

一金貳拾圓也(第二回) 多度津 丸尾猪太郎殿

一金拾五圓也 牛込 檜山錦光殿

一金拾圓也 本郷 三井光彌殿

一金拾圓也 札幌 佐々木哲郎殿

一金拾圓也 横須賀 和才齊殿

一金五圓也 山口 末永浩司殿

一金五圓也 大分 樋口安治殿

一金五圓也 大森 伊藤玉子殿

一金五圓也 八王寺 指田嘉吉殿

一金五圓也 府下 隅山廣吉殿

一金參圓五拾錢也 大分 樹心婦人會殿

右之通りに候也

大正參年四月廿五日

世話人總代 長尾 收一
會計監督 西澤 善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存
候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

- 一金參圓也 滋賀太田丑三郎殿
- 一金參圓也(第貳回) 府下中里庄五郎殿
- 一金貳圓也 大分安倍清殿
- 一金貳圓也 島根成相圓藏殿
- 一金貳圓也 麻布青木正藏殿
- 一金貳圓也 下谷樋口りつ子殿
- 一金貳圓也 福井西島殿
- 一金壹圓也 山形鈴木義含殿
- 一金壹圓也 滋賀北川齊次郎殿
- 一金壹圓也 本所野澤なか子殿
- 一金壹圓也 北海道野原鐵次郎殿
- 一金壹圓也 山下正人殿
- 一金壹圓也 本所無名氏殿

總計金參百參拾五圓五拾錢也

累計金壹萬參千五百

四拾五圓七拾壹錢也

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社
東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より
差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏
面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道
會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候
二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求
道誌上に報告可仕候
三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜
敷候

一蓮院秀存師自記 佐々木月樵編

製本 出來 秀存法話

本書は秀存師自筆の法話六十篇を集めたるものにして何れも他力信念の自督をのべた
難有い法話であります。秀存語録を讀んで信念の資とせられんは、本書を讀まずに信味
の涵養を怠りてはなりません

クロース綴
金一圓
郵税八錢

内 容 目 次

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| 第一席 心のかけ損ひ | 第二二席 冥加 | 第四一席 思案の頂上(上) |
| 第二席 信者にまぎれて | 第二三席 強き基打ち | 第四二席 思案の頂上(下) |
| 第三席 一大事といふこと | 第二四席 算用ころろ | 第四三席 無義の義(上) |
| 第四席 浅きは深き也 | 第二五席 うつらふ秋 | 第四四席 無義の義(下) |
| 第五席 深めても浅し | 第二六席 無明と煩惱 | 第四五席 愛生と幸福(上) |
| 第六席 頼むといふは | 第二七席 うつくしき佛 | 第四六席 愛生と幸福(中) |
| 第七席 たゞのたい也 | 第二八席 たのむ人 | 第四七席 愛生と幸福(下) |
| 第八席 親しみ合ふ事 | 第二九席 實意のみ | 第四八席 鞭影 |
| 第九席 須の文點 | 第三〇席 有縁の人々 | 第四九席 脱がぬ履(上) |
| 第一〇席 善知識 | 第三一席 御恩は廣大なり | 第五〇席 脱がぬ履(下) |
| 第一一席 裏も表もなし | 第三二席 本願に喰違ふ | 第五一席 悪き迷心(上) |
| 第一二席 油斷のさま | 第三三席 その事とばかり | 第五二席 悪き迷心(下) |
| 第一三席 法味樂 | 第三四席 大欲と小欲 | 第五三席 五つの濁り(上) |
| 第一四席 聞信と思信と | 第三五席 念佛者の札 | 第五四席 五つの濁り(下) |
| 第一五席 聞不具足の人 | 第三六席 疑情の礙 | 第五五席 隣家の寶(上) |
| 第一六席 後生たすけたまへ | 第三七席 平生即臨終(上) | 第五六席 隣家の寶(下) |
| 第一七席 佛法は無我にて候 | 第三八席 平生即臨終(下) | 第五七席 縫れの呼聲(上) |
| 第一八席 頼むとお助けと | 第三九席 弘誓の力 | 第五八席 縫れの呼聲(下) |
| 第一九席 惡きは自力也 | 第四〇席 死出の旅路 | 第五九席 往生即成佛(上) |
| 第二〇席 墮つる後生 | | 第六〇席 往生即成佛(下) |

東京二 集 町五 無 我 山 房 振三 替二 東二 京二

近 角 常 觀 著

訂正
補増

信仰之餘瀝

第 定價 卅 錢
版 貳拾
袖 郵 稅 四 錢
珍 美 本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心の經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十二版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、附録正は勿論、新に増補する所あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として予が信仰的實驗なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根柢は本書に於て明かならん。

懺悔錄 附録「歎異鈔」

第 定價 二十 錢
八 郵 稅 四 錢
版 袖 珍 美 本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人教濟の眞意を闡明せんが爲に就述したるものにして、著者は先づ自己の経験に筆を起し、半歳の以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と服後に、佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇闇に一帶せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慮を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯、救濟の一道ある所以を可憐懇切に詳述したり。蓋し是れ「懺悔錄」の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。

人生と信仰

第 定價 卅 錢
五 郵 稅 四 錢
版 袖 珍 美 本

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| ◎第一章 人生問題と信仰 | ◎第二章 悲觀思想と信仰 | ◎第三章 倫理力行と信仰 |
| ◎第四章 犯罪心理と信仰 | ◎第五章 社會問題と信仰 | ◎第六章 國家秩序と信仰 |
| ◎第七章 世界宇宙と信仰 | | |

本書内容は目次に示すが如し。先年「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の根本的は法律的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。是れ本書ある所以也。人生

以上の三書是非どなたも讀んで下さい

發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所